明治二十六年四月十五日發兌

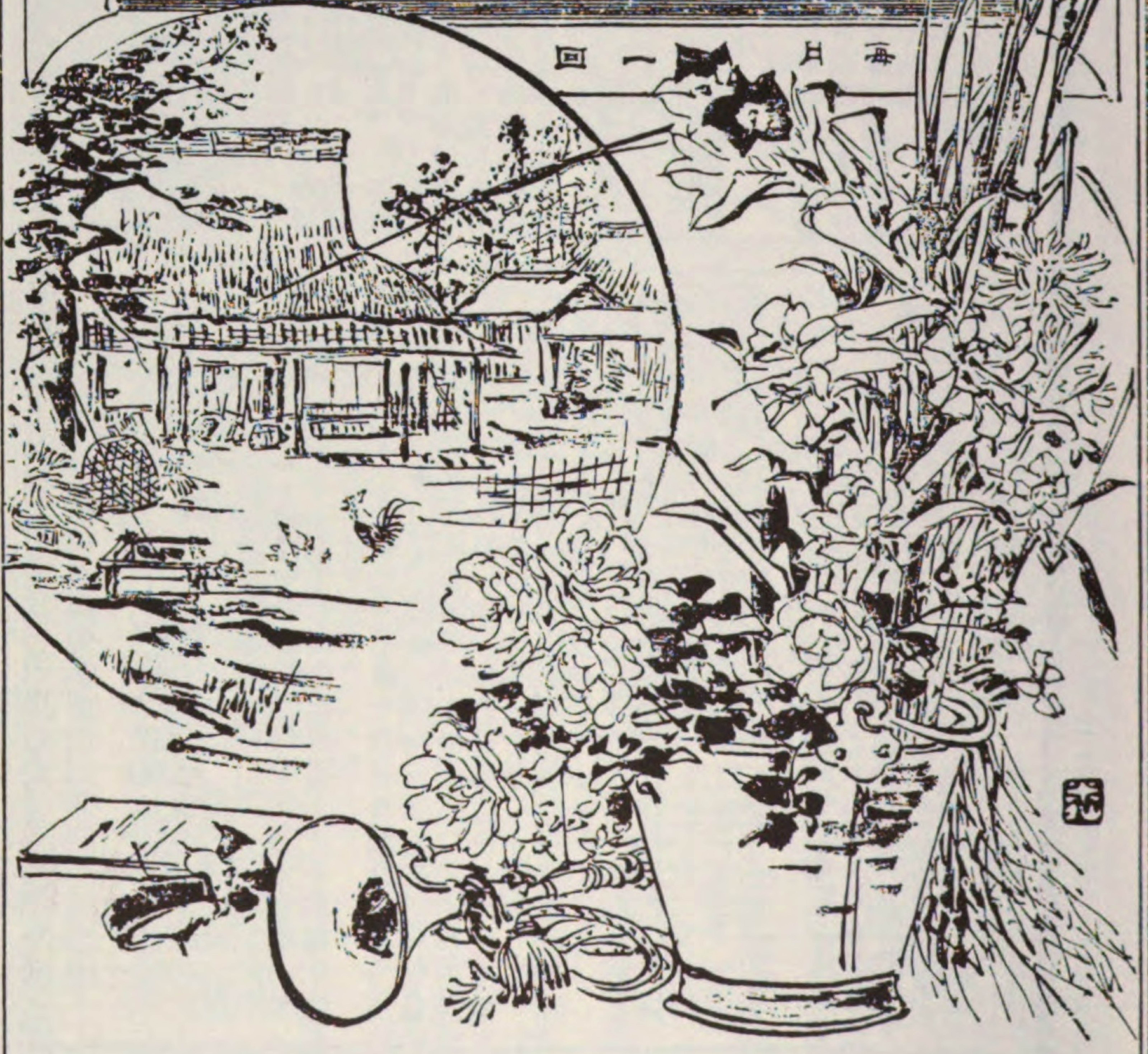
THE HOME JOURNAL

家庭雜誌

東京家庭雜誌社發兌

定價金五錢

每月一回



第八號

漢文學講義録

初號ヨリ近刊マデ缺本ナシ

第七十七號既刊

科目及講師

科目	講師
左傳	近藤南州
孟子	四屋恒之
論語	萩原西疇
中庸	三島中洲
莊子	大野雲潭
詩經	宮內鹿川
八家文	五十川訒堂
三體詩	山田新川
大學(完結)	三島中洲
孫子(完結)	內藤耻叟
詩話(完結)	石橋雲來
文話(完結)	岡三慶
史記列傳	石川鴻齋
政記論文	生駒贍山
十八史略	山田濟齋
文章軌範	土屋鳳洲
外史論文	池田蘆洲

定價 一部金八錢●十部前金七十錢●廿部前金一圓三十錢●卅部前金一圓九十錢遞送料一部ニ付一錢宛

漢學ハ益友社ノ力ニ依リテ**再興**セリトハ世論ノ許ス所ナリ弊社自ラ然リト云ハズト雖モ自ラ任ズル所ハ實ニ此ニ在ルナリ諸鴻儒ノ斯學ニ熱心ナル亦弊社ノ微衷ヲ憐ミ**切實**ナル講說ヲ寄セラレシハ弊社ノ四方講學諸君ト共ニ拜謝スル所ナリ唯夫レ切實周到ナ**周到**リ故ニ他ノ營利專一ノ書肆輩ガ鹵莽疎雜偏メ紙數ヲ限テ講義ヲ依賴スルガ如キ神速手段ヲ執ル能ハズ是レ講學諸君ノ往々遺憾トセラルヽ所ナリ故ニ此般第六十五號ヨリ**大改良**ヲ施シ定價ヲ動カサズシテ毎號八十八頁ノ大冊トナシ且毎月五回ヅヽノ發行トシ本年中ニ總テ**完結**セシメンコトヲ期セリ四方講學諸君請フ弊社ノ熱心勉勵ナルヲ諒シ諸鴻儒ノ惠ヲ受ケラルレバ幸甚

發行所 東京麹町區富士見町一丁目 益友社

校註史記讀本

●池田蘆洲先生輯著

全壹百三十卷合本五冊

上等西洋紙和裝美本

毎月一冊宛發(列傳之部)本月下旬發兌●全部定價金貳圓拾錢○遞送料四十二錢●第一冊(本紀之部)既刊定價金三拾六錢○遞送料六錢●但毎冊頁數ノ多少ニ依テ價格ヲ異ニス

本文ノ訛誤ヲ訂シ舊註ノ妄誕ナルヲ辨ジタルハ本書ノ特色ニシテ殊ニ中學校師範學校等ノ敎科用書ニハ最良ノ書トス

箋註十八史略讀本

●山田濟齋先生箋註

全七卷合本一冊

定價金三十二錢

遞送料八錢

本書註釋ノ簡明ニシテ痛快ナルハ他ニ比類ノ無キ所ナリ今敢テ喋々ト自贊セズ

文章軌範讀本

●池田蘆洲 ●山田濟齋 兩先生校訂

全七卷合本一冊●定價金拾五錢●遞送料四錢

此書ハ既ニ東京府尋常師範學校ヲ始メ各府縣師範學校中學校ノ敎科書ニ採用セラレタレバ註釋評語ノ切當ニシテ初學ニ有益ナルハ敢テ言ヲ待タズ

四書讀本

●本城蘭峯先生校訂

全四卷合本一冊

定價金拾五錢

遞送料四錢

大學中庸論語孟子ハ讀書家必要ノ書殊ニ文章ヲ作リ道德ヲ講ゼントスル人ハ此書ヲ坐右ニ備フルノ輕便ナルニ如クモノ非ラザルナリ

●賣捌所●東海堂●幾々堂●東京堂●不二軒●上田屋支店●武藏屋●盛春堂●

漢文學講義錄

初號ヨリ近刊マデ缺本ナシ

第七十七號既刊

科目及講師

左傳	近藤南州
孟子	四屋恒之
論語	萩原西疇
中庸	三島中洲
莊子	大野雲潭
詩經	宮内鹿川
八家文	五十川訒堂
三體詩	山田新川
大學（完結）	三島中洲
孫子（完結）	内藤耻叟
詩話（完結）	石橋雲來
文話（完結）	岡三慶
史記列傳	石川鴻齋
政記論文	生駒膽山
十八史略	山田濟齋
文章軌範	土屋鳳洲
外史論文	池田蘆洲

定價　一部金八錢◉十部前金七十錢◉廿部前金一圓三十錢◉卅部前金一圓九十錢遞送料一部ニ付一錢宛

漢學ハ益友社ノ力ニ依リテ再興セリトハ世論ノ許ス所ナリ弊社自ラ然リト云ハズト雖モ自ラ任ズル所ハ實ニ此ニ在ルナリ諸鴻儒ノ斯學ニ熱心ナル亦弊社ノ微衷ヲ憐ミ切實ナル講說ヲ寄セラレシハ弊社ノ四方講學諸

周到

君ト共ニ拜謝スル所ナリ唯夫レ切實周到ナリ故ニ他ノ營利專一ノ書肆ガ鹵莽疎雜僅メ紙數チ限テ講義チ依賴スルガ如キ神速手段チ執ル能ハズ是レ講學諸君ノ往々遺憾トセラル丶所ナリ故ニ此般第六十五號ヨリ大改良チ施シ定價チ動カサズシテ毎號八十八頁ノ大冊トナシ且毎月五回ヅヽノ發行トシ本年中ニ總テ完結セシメンコトチ期セリ四方講學諸君請フ弊社ノ熱心勉勵ナルチ諒シ諸鴻儒ノ惠チ受ケラルレバ幸甚

發行所　東京麴町區富士見町一丁目　益友社

史記讀本

●池田蘆洲先生輯著
●全壹百三十卷合本五冊
●上等西洋紙和裝美本
毎月一冊宛發兌（列傳之部）本月下旬發兌●全部定價金貳圓拾錢○遞送料四十二錢●第一冊（本紀之部）既刊定價金三拾六錢○遞送料六錢●但毎冊頁數ノ多少ニ依テ價格ヲ異ニス

本文ノ訛誤ヲ訂シ舊註ノ妄誕ナルヲ辯ジタルハ本書ノ特色ニシテ殊ニ中學校師範學校等ノ教科用書ニハ最良ノ書トス

十八史略讀本

●山田濟齋先生箋註
全七卷合本一冊
定價金三十二錢
遞送料八錢

本書註釋ノ簡明ニシテ痛快ナルハ他ニ比類ノ無キ所ナリ今敢テ喋々ト自贊セズ

文章軌範讀本

●池田蘆洲●山田濟齋　兩先生校訂
全七卷合本一冊●定價金拾五錢●遞送料四錢

此書ハ既ニ東京府尋常師範學校ヲ始メ各府縣師範學校中學校ノ教科書ニ採用セラレタレバ註釋評語ノ切當ニシテ初學ニ有益ナルハ敢テ言ヲ待タズ

四書讀本

●本城麗峯先生校訂
全四卷合本一冊
定價金拾五錢
遞送料四錢

大學中庸論語孟子ハ讀書家必要ノ書殊ニ文章ヲ作リ道德ヲ講ゼントスル人ハ此書ヲ坐右ニ備フルノ輕便ナルニ如クモノ非ラザルナリ

●賣捌所　●東海堂●幾々堂●東京堂●不二軒●上田屋支店●武藏屋●盛春堂●

無病の人少量を用ゆれば忽ち筋肉を太め英氣を加ふ云に云われぬ不思議なる樂を感ず

米醫トロングン氏方劑

唯一 滋強丸 日本

飲さスグニ効能顯る

記憶減弱	陰莖萎縮	陽物無力	老衰	腦病一切
遺精	腎虚	手淫諸害	氣鬱諸病	貧血諸病

(卓効體狀如山)

其重きも一廻より三廻にて治す數年の大病も七廻にて保證す

無効返金 證書添ゆる

無病の人夜る少量を試み見よ忽ち非常なる愉快を覺ゆし●又他藥と異り毫も藥害なし●用て五間時ゝ後ちき始む

本舗横濱野毛町

電話番號百七十九番

タイガー商會

僞せ物出來たり御用心

賣捌は全國有名藥店に大概ある●若御近所藥店になくは御送金同時郵送す●京濱間は持參す全國無遞送料

定價

(一廻)八十五錢

(三廻)二圓廿錢

(七廻)五圓廿錢

櫻痴居士福地源一郎著

再版



定價 三十五錢

郵税六錢

經濟雜誌評　櫻痴居士キッボンの羅馬衰亡史を讀み深く感する所あり、以て幕府衰亡史を著はさんと欲す、而して其志を爲す能はず先づ此編を著はして以て其骨子を示すと云ふ、余此を讀み、能く其要を得たるを見るなり、蓋し居士の文章明治の文學士に於ては先鋒と稱すべし、然れとも其文多く日々新聞に載せたる時文なるを以て後世に至りては之を顧みざるべし、余輩私に之を惜みたりしに此篇出つるに及ひて居士の文初めて傳ふべし、而して其概括明斷の力亦た後人批判の資とならん、豈に快ならずや、蓋し近時幕末を紀するの書多し、然れども能く纎細に其事情を悉すに至りては居士の筆に及ぶものなかるべき也、

發兌元

東京々橋區日吉町四番地

電話七十番

民友社

○東京●上田屋●東京堂●東海堂●巖々堂○大坂●吉岡●梅原◎嵩山堂

●●平民叢書第二卷出づ●●

平民叢書第二卷 世界經濟上之變動

美麗なる小冊子、紙數百六十頁餘
定價金十二錢、郵税二錢本月廿一日發賣

第一章、輓近經濟界の動亂○第二章、生產、分配の新機關及其影響○第三章、物價下落及其原因○第四章、金銀比價の變動○第五章、干涉保護政策と經濟的動亂○第六章、現時歐羅巴諸國の商業政畧○第七章、經濟的變動の社會上に於ける影響○第八章、勞働者の不平○第九章、結論

平民叢書第一卷を讀み當に其の**二卷を讀まざる可らず**

日本經濟界の變動を知らんと欲せば、又た當に**世界經濟上の變動を知らざる可らず**

是れ本篇が諸君に見えざる可らざる所以也。

平民叢書第一卷 十九世紀の大勢

再版出來

美麗なる小冊子、紙數百廿二頁、定價十二錢郵税二錢、三月十九日發兌、四月二日再版

◎十九世紀前記○十八世紀の地位○革命の時代○殖産界の革命○思想界の革命○道德的革命○佛國革命の大危機◎第十九世紀○十九世紀の物質的進歩○物質的進歩と文明○英國の物質的進歩○物質的進歩と思想界○物質的進歩の功德果にて如何○物質的進歩貧富の懸隔○十九世紀文明の前途○佛國革命の影響○平民的大勢○政治上に於ける平民主義○佛國革命の反動○希望の時代

非常の大喝采は本卷に光耀を與へたり、**初版二千部**、旬日を出でずして、已に之を**賣盡**し、今や**再版出來**せり、請ふ好時期に後るゝ莫れ、

發兌元　東京市京橋區日吉町四番地　**民友社**

家庭雜誌品切の分

壹號、貳號、三號、四號、五號

家庭雜誌定價表

一冊	前金五錢	郵税地五錢五厘
六冊	三拾錢	郵税地三拾三錢
十二冊	金五拾錢	方共五拾六錢

廣告料 二拾四字行數回數に付割引無 **八錢**

本社は前金にあらざれば發送せず爲替は芝口郵便局宛郵券代用は爲替の無き地に限り一割增しの事

發行所　東京市京橋區日吉町四番地　**家庭雜誌社**

發行兼印刷人　垣田純郎
編輯人　堺越芳太郎

明治二十六年四月十五日發兌

家庭雜誌第八號

目錄



家庭雜誌第八號

（明治二十六年四月十五日發兌）

社説

手近き道德



道德とて必らずしも遠き所になし、己れの手の屆く所に、修養せねばならぬ事も工夫せねばならぬ事も澤山ある也。その中にて大切なるもの丶一は、節制にぞある。節制を平たく云へば『程能き』と云ふとなり。

人間不幸の重なるものは、多くは自から招くものなり、その自から招く不幸の重なるものは、多くは不節制より來る。例せば身躰の不健全は、如何にも多くの苦痛を人に與れども、此の苦痛たるや、自から好んで生理の規則を破りしより來らざるもの幾んど少なし。英國の大醫クラルクと申す人云ひけるは人の心に精神の宗教を要する如く、身の健全にも生理の宗教を要すと。生理の宗教とは、節制を守ることとなり。過度の飲食、過度の勞力、過度の擧動、過度の心配、總て度に過きるとは、皆な事に益なくして身に害あり。能く謹み戒めねばならぬとぞかし。

凡そ一家の主人たるもの、主婦たるものは、別けて心を節制の點に注がざる可らず。主人が餘りに夜を深かし、餘りに朝寢をなすが如き、斯くなしたりとも別段

差支なき様なれども、此れが爲めに家庭の取締は如何に破れ來る可きや、况んや主人たるものか酒に醉ひつゝ外より歸り來るが如き、或は時ならぬ酒宴を催ふして家庭にて立ち騒ぐ抔、誠に些瑣たる事の様なれども、家庭健全の空氣は、追々此等の爲めに腐敗し來ることを忘る可らず。

世の中には道徳〳〵とて左も鹿爪らしく、八ヶ間敷、道徳は月の世界にでも在るかの如く、云ひながら、己れが爲す所は、或は借金して人に返さぬとあり、或は無遠慮に噓を言ふものあり、或は忠孝仁義の名號を唱へつゝ、人に云はれぬ淺ましき事を做すものあり、而して手近き道徳に到りては、一切手を着けず。人若し之を議すれば、『何にサ斯れ程の事が』と更らに顧りみず。然れども人の品性は此の手近き道徳より修め來るものと知らずや。

総て萬事節制を附け、程能くするは、人間美徳の隨一ぞかし、身躰節制を行へば、身躰健全に。心節制に順へば、心和平にして、その樂み甚た多し。節制を以て人と交れば、交際その道に適ひ、節制を以て事に從へは、事その宜しきを失はす。彼の子女を愛するの餘り、之を訓戒せす、遂に驕兒とならしむるが如き、子女を訓戒するの餘り、之を畏縮せしめて、その天眞を殘ふか如き、儉約をして吝に流れ、寛大にして奢りに過き、樂んで淫し、哀んで傷るが如き、皆その節制を失ふが故なりと爲す。

終りに一言す可きは、子女敎育の事なり、諺に『習ふより慣れ』と云ふとあり。子女敎育の奥意は、彼等をして知らず覺へず、節制に慣れしむるに在り。一日又た一日、何時の間にやら、克己を須ひず、其一擧一動『程能き』定規に慣れ、遂に紳士となり、淑女となるに到る、食物なり、衣服なり、玩具なり、幼稚園に學校に往返するとなり、出寢就寢なり、散歩行樂なり、総

てれ〲の程度を考へ、その子女をしてその程度に應して、之を履み行はしむるに在り。唯た今日に於てはその教育の責めに當る父母長老たるものか、動もすれば情の動くまゝ意の向ふまゝ、所謂る我儘の上に我儘を働き、遂に子女に向て節制を敎へざるのみならす、その自から爲す悪行悪例の爲めに、彼の子女をして何時の間にかその悪行悪例に慣れしむるに到る、豈に恐れざる可けんや。

斯く不節制は、獨り我身を禍ひするのみならず、その罪なき子女に迄、その後來繼續す可き一家末代迄、禍ひを及ぼすものたるを知らば、何人も宜しく胸に手を當て、篤と考ふ可きなり。

實に節制は、百德の基本也、道德は手近にあり、決して之を棄てゝ遠きに求むるに及ばぬなり。

論説

養子

鐵斧生

養子てふ表題を讀みてさへ、顏を澁かめ胸に釘打たる、思ひなす者、世には必ず其の人ありと信ず。わが家庭の内に心配の種を播くもの實に養子制度に如くもの無けれはなり。諺に『小ぬか三合持ば養子にゆくな』とすら言ふ程なれば、養子たる者の苦痛察するに餘あり、然れども苦痛は養子にゆく人のみに限らず、養子を迎ふる方にありても亦た等しく苦痛あり。

養子一件に付て起る家庭の風波は毎に烈しく且つ深し。或は親族內の紛紜となり、甚しきは裁判事となり、偶〲破裂せざるものは、一家敵同志の寄合の如く、何事も奥齒に物の挿まりし如く、快然たる笑を聞くが

如きは夢にも出來ぬ事となるなり。豈に不幸の極に非ずや。

如何にすれば此の大不幸を免ぬかれ得べき。

封建社會に重んぜらるゝものは家なり、人に非ず、人は寧ろ家の附屬物の如し。家庭のあらゆる物悉く家の爲に、捧げらる、妻も家の爲めに娶り、又た家の爲と稱して追ひ出す。即ち家名斷絶の如きは、罪惡中の罪惡、恥辱中の恥辱、不孝の尤も甚だしき者として忌まれたり。養子制度は則ち『家』主義の絶頂なり、即ち家名相續は養子制度第一の目的なり。弊害の根本は已に玆に在るなり。

其の第一の目的は家名相續の爲めなりとは云へ、其結果は財産相續となる。紛紜のもと又た實に玆にあるなり。

養子を迎へざらんか、家名斷絶す、迎へんか一家の財産は同時に養子の手に移るを覺悟せざる可からず。然るに實際此覺悟ある者少なく、多くは知らず〳〵未練を財産の上に遺す。之れに反して養子に來る程の者は固より財産相續を目的とするが世の常なり。斯の如くにして衝突の起らざるを望むも難し。養子の紛紜は半ば財産上の紛紜なり。故に養子に迎ふる者は、始めより財産相續者を迎ふると承知し、豫め其の間に周密なる要意ある可し。親族縁者と雖も、財産上の事は、區畫を明了になし置かざる可からず。養子に關して財産上の悶着なくんば已に重荷の半を卸したるなり。

養子は多くの塲合に於て入婿なり。入婿と家づきの娘との和合如何は又た難問題の一なりとす。家の老父母毎に血肉の愛情に惹かされ、娘に甘く養子につらく、娘を誘ふて良人を凌ぐ程の我儘放題に至らしむ、果は影言となり、無口となり、忍び泣となり、白眼み合となり、口論となり、呪咀となる。かゝる塲合に於て、其の責寧ろ老親に在り。故に養子を迎へんとする老親

は前以て娘の教育は勿論、已に養子を迎へたる後、娘に對する處置に付ては豫め十分の注意を要す。

國に二人の君あるを許さず、一家亦た二人の主人ある可からず。然るに養子制度は毎に二人の主人を造らんとするの傾を有す。舅姑の干渉これなり。舅姑の干渉は家妻すら堪ゆる能はず、况んや男子をや、一家の主人をや。而も養子程能く舅姑より干渉せらるゝはあらず。半ば主人の如く、半ば居候の如く、財産の番人の如く養子を取扱ふに至りては、風波のもとは干渉者に在り。已に主人として迎へたる以上は何處迄も一家の主人として之を待ち敢て一言の干渉めきたる事なきを要す。故に舅姑は成る可く別居を可とす。

養子制度に伴ふて尤も起り易きは親族の干渉なり。一國の政治が他國より干渉を受く可からざる如く、一家の政治にして親族縁者より干渉せらるゝ時は紛紜決して絶ゆる時なし。養子に付て親族の干渉するは親切心にあらずして、多くは利己の爲めなり、中等社會以上に於て最も然り。故に養子撰擇の際、又た已に迎へたる後と雖も、親族の干渉は必ず之を避くるを要す。

然りと雖も養子は當底養子なり。他人を家庭の中に導きて主人たらしむるなり。養子たる人も、養子を迎ふる者も、始より其の覺悟を定め、大概の事はあきらめざる可からず。邪推をして互の間に起らしむる勿れ。養子に付て尤も起り易きは邪推なり。養子と財産、養子と家付きの娘、養子と舅姑、養子と親族、其の風波悶着は過半互の邪推にもとづく也。邪推は邪推を生む、邪推は家庭の大敵なり。邪推の霧一度び家庭和合の天國を掩はゞ、爽快麗朗の天日再び仰ぐに由なし。最も和平幸福なる可き天國は、最も悲慘憂愁の地獄となる。故に努めて影日向なく、相信じ相たすけ、己を忍びて人に譲り、以て和樂を計らざる可からず。

然れども記臆せよ、養子制度に由りて家庭の幸福、一

家の人々の幸福、子孫の幸福を望むは、家名相續の爲めに有らゆる者を犠牲に供したることを忘れたる者也。養子制度は其の根本に於て當底個人の幸福利益と一致せざるなり。故に余をしてありのまヽに言はしめば、斷然養子制度を廢するに在り、養子せざるに在り。『家』の爲め、過去の弊習の爲めに人間の幸福を犠牲にするが如きは不道理の甚だしき者なり、愚の甚だしきもの也。

若も女兒のみにして男兒なくば、財産を女兒等に平分して寧ろ他家に歸がしめよ、是れ却て女兒の爲めに幾増の幸福なり。全く讓る可き子供なくば、最近親族に讓るも可なり、有爲の人物に贈るも可なり、老後の自活費は、讓りたる人より養育料として一定の約束を結び置かば可なり。或は遺言して凡ての財産を公共の用慈善恤給の用に寄附するも可なり。

科學

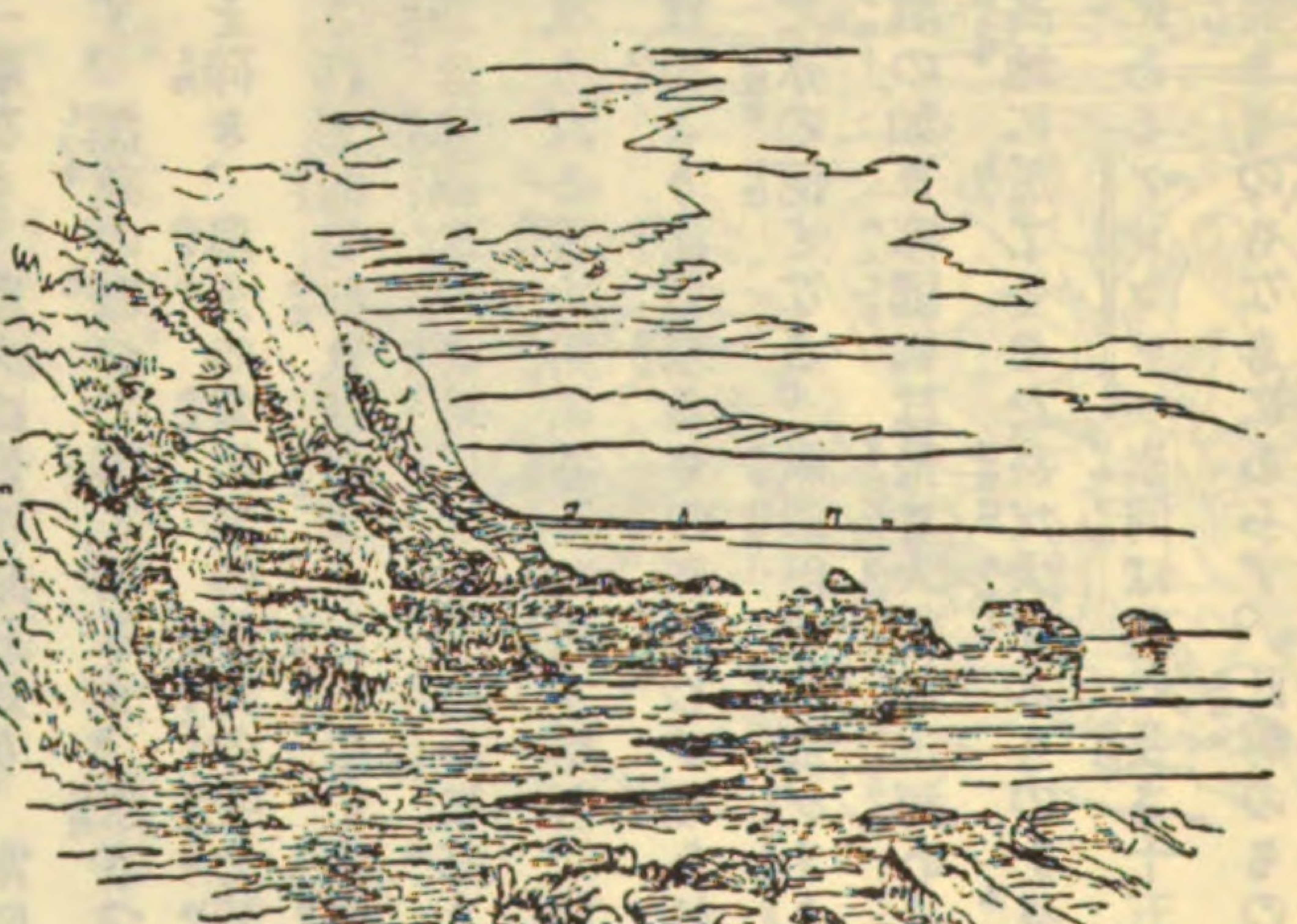
二人の大彫像師（つヾき）

大彫像師の一人なる水のことに就ては既に多くを説明せり、されど倘ほ水の最も大なる團體即ち海のことに就ては未だ云ふ所あらざりき。此の海なるものも亦彫像師として陸地の形狀を變化せしむることを怠らず。風暴れたるときは怒濤の絶壁を打つのみにてさへも能く岩を碎き汀に幾片の石を轉々せしむるの力あり。此等の怒濤が恐るべき勢力を以て絶壁を打つや、巖の縫目に充てる空氣を壓搾し、其の壓力を以て岩を割り、或は其の裂口を大ならしめ、或は穴を穿ち、遂に絶壁の幾部分づヽを削り取るなり。

されど普通の彫像師が徒手を以ては仕事をなさヾるが

如く、海も只だ其の手たる波のみを以ては、如何に筋骨は逞ましくとも大なる彫像術を振ふことをなさず、また其の働きに必要なる道具を有す。此の道具は絶壁の下に散在する砂礫及び岩石なり。諸君は嘗て吹く風暴れて海の面、すさましく狂へる日、岸に碎くる激浪怒濤を見られたることもあるべし。其の時必ず、如何に彼等が其の道に當れる岩石を捲き上げ、之をなげつけ之をして相擊つて碎けしむるかを見られたるなるべし。風此の如くに暴れ、浪此の如くに高き時は、此等の岩石は絶壁の麓の向つてなげつけられ、一打ち、二打ち、打つ毎に巖を脆くし、遂に幾度幾十度の暴しを經て、絶壁は其の底をえぐられ、大小の岩石轉がり落つ。此等の大なる岩はまた、波の爲めに搗き碎かれて小石となり、削り取られながらも尙ほ波の力を嘲るが如く儼然として衝つ立てる殘の絶壁を打ち碎くの用をなす。

ギーキー教授の云ふ所によれば、暴しのときベルロツク燈臺を打つ波の力は、一平方吋毎に三噸の物體をなげつくるに等しと云ひ、ステベンソンは二噸の重さある大石が燈臺の礎面を打ち越したりと云ふ。此の一事を以て、海岸を打ち碎く波の非常なる力を知るに足らむ。



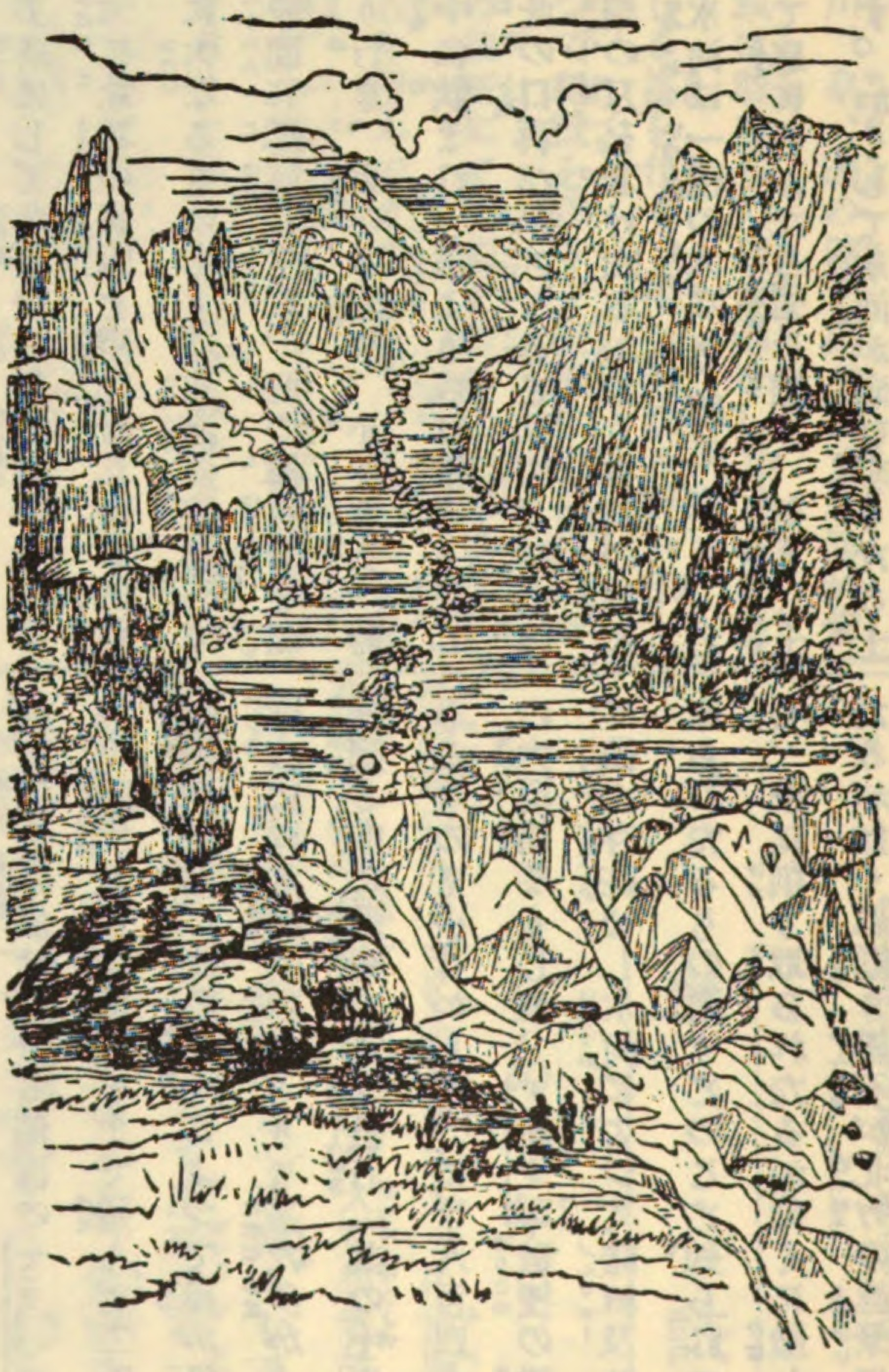
北海に遊べるものは到る處、茲に圖して示せる如き景に遇ふなら

ん、或は更に怪にして險なる景を目擊せしならん、或は奇巖怪石烏帽子の如きもの、或は鷲の羽を擴げて翔り、勢ひを集めて、其の餌を攫たんとするが如き者、或は猛虎の踞するが如きもの數里に連なる者あらん。或は城門の如きあり。或は磨ぎ上げたる精米ともあやまたるゝ砂を以て敷ける濱の其の間を中斷するものあらん。海岸の美觀――砂濱、險しき岸、靜かなる灣、奇怪なる洞穴、大巖石に趣を添ゆる樣々の縫ひ目裂け口――此等のものは皆彫像師水のなせる偉業なり。岩の最も堅き處には彫像師の意氣最も盛んに、其の手腕を振ふの機會最も多く、其のなせし業最も精巧を極む。

大彫像師の一人たる水のなす所此の如し、此に優らずとも劣らぬ他の大彫像師氷のなす所如何なるかを少しく說かむ。先づ記憶すべきは氷の中にて最も微力のものゝ如くに見ゆる霜が地を碎くに甚だ多くのヿをなす一事なり。農夫は皆な此を知り、常に霜の朝に地を耕す、濕氣の凝つて霜となるや、氷りつゝある間に土塊を碎き、農夫の爲に其の勞力の半を減ず。

されど此の如きは固より氷のなす大事業にあらず。雪多き寒國また高地にては、山々に降り積りまた積み重なりたる雪次第に谷々に辷り落ち、前に落ちたるものは後より落ち來るものに壓しつめられ、壓し固められて氷の河となる。歐羅巴の北部グリーンランド及び諾威の如き寒國には最も大なる氷河あり、瑞西の如き高地に於てもまた甚だ大なるものを見る。アルプス山にあるアレッシュ氷河は其の長さ十五哩に達し、更に長きものもなきにあらず。此等のものは河とは稱せらるれども、普通の河の如く快馬の平原を走るが如く、大隊の進軍するが如くにはあらで、其の流るゝと最も遲く、流の中部は夏秋の際二十四時間平均二十吋乃至二十五吋、側部は十三吋乃至十九吋の速力を以て動

く。如何に彼等か動くかは今ま解說するの餘地を有せず、只だ此等の氷河は谷の彎狀に從つて流れ下り、空氣の暖なる地に達し、融けて川をなすとのみ云ひ、其の他の實狀は、下に揭けたる圖の說く所ろに讓らむ。」氷河は其の河口に達して石を含める幾十の細流を吐き出す。此等の石は圖に示す如く氷河の中央と兩側とにある三列の石群より來



るなり。此等の石の何處より來りたるかを知り難きにあらず、前にも云へる如く水と霜との力によつて大石の表面より削り取られたる石片、峻しき山腹を轉げ落ちて氷河の兩側に連なり列す。中央にある一列は二氷河の相合するより生ず。此等の石は氷河の勢につれて徐々として流れ、氷河の融くる處に至つて落ち重なり、年を追ふて驚くべき

大石壁を築く。古昔氷河の流れたることありし紀念碑としてチユリン近傍の地方に立てる石壁は千五百呎の高さに及ぶと云ふ。

故に、もし氷のなす所にして此等の石を運搬するのみに止まらしむるも大に地球の表面を變化せしむるに力あらん、されど更に大なるものあり。氷河の流れ行くや、時として其の表面に罅隙を生ず、此の罅隙口を開くと、益〻廣くなり行き、大なる岩や、小さき石、時として、此の口の中に飲まれ、後より或は横より壓し來る氷の爲めに、此の口再び閉ざゝると共に、封じ込められ、木の板に鋼の刄を着けたるか如く氷河の底に凝り着く。かくて氷河は一種の大なる鉋となり、谷を流れ下るに從つて底に沿ふたる岩を擦り、削り、土を奪ひ、谷を深くす。かくして氷河か奪ひ來りたる土砂の量幾何なるかを知らんと欲せば、只だ氷河の口より落つる細流を一見せば足りなん。其の水は甚た濃く深黄色を帶ぶ。此の水に含める多量の泥は水と共に流れて河に入りて河の水を染む。アルプス山の泥はかくの如くにしてローン河及ライン河の水を濁す。ローン河の泥を澱置せしむる瑞西のゼネバの湖頭にはローマ人の時代より今に至るまで殆んど二千年の間に廣袤一哩半の陸地、此の泥土によつて築かれたり。

往古には氷河の數今よりも甚た多かりき。歐羅巴の北部到る處に散布する大巖石（其の中には農屋程の大さあるものも少なからず）は千八百四十年までは學者間の大疑問なりしが、アガシス教授の説明によつて始めて往古存在せし氷河によつて諾威及び魯西亞より運搬せられたるものなりとのことと知られぬ。此等の奇巖怪石、或は削り取られたるが如くに險しく、或は磨かれたるが如くに圓き巖石が北方の風景に趣を添ふることと幾何許りぞ。名高き瑞西の絶景、アルプス山の奇觀も、此の卓越なる彫像師—氷—のありたればこそかく

も絶景奇觀となりたるなれ。
以上略ぼ二大彫像師、水と氷との技倆の一般を窺ひ得たり。我等は雨、川、泉、海の波、霜、氷、氷河が皆な彫像師として、或は時として塑像師として、谷を刻し、洞を穿ち、峻しき峯を作り、平らかなる野を作り――此處に岩を削つて絶壁を作り、彼等に土を運んで平野を作り――一の場所にては岩を碎ひて細末となし他の場所に於ては石を積んで大なる築山を作るを見たり。歩を戸外に移す一歩に過ぎざるも尙ほ二大彫像師のなせし業を見ざることと能はず。如何に小さき溝、淺き谷も皆な彫像師が休まず働きつゝあることを告ぐるなり。我等は短かき生命の間に大なる變化を見る能はずといへども、山河自然の美は常に此の美は彼の徐ろにしかも休まず働ける二大彫像師に負ふこと最も多きを告ぐるなり。（つゞく）

次の號の此の欄に載すべきは
『科學者の昔の夢』と題せるもの

史談

ユーゴの少年（上）

佛蘭西のユーゴにあらずユーゴの佛蘭西なれ、とまで稱せられし佛國の大人はた大文學者故ヴィクトルユーゴの少年の事を少しくこゝに記さむと欲す。
佛國大革命の焰已に衰へて奈破烈翁一世の日方さに昇りはじめし千八百〇二年二月、佛國べサンソン市の或る武官の家に一小兒生れ出でぬ。丈は尺に滿たず、頭は人並よりすぐれて大なれども手足繊小にして、半ば死したるが如く、生存覺束なかりければ父母は取り急ぎて洗禮を受けしめたり。生れ出でゝより十五ヶ月が

間は、其肩力無ふして頭は常に胃の方にウナ垂れ、一躰の羸弱言語に絶せしも、母は愛と忍耐と精細の注意もて之を壯健の男子に育て上げ、斯くて此病弱の小兒は八十四歳まで生き永らゑ、ヴイクトルユーゴの名は佛國の光榮となれり。搖籃を搖かす者は天下を搖かすと、豈に眞ならずや。淸香多くは脆き花に含まれ、纎細なる貝には往々眞珠を藏す、此を思へば小兒の養育まことに忽にす可からざるなり。

ユーゴの父ヨセフレオポルドユーゴは初より身を武官の籍に置き、奈破烈翁並に其弟ヨセフボナパルトに仕へて後少將に進み伯爵を授けらる。時まさに兵馬倥傯の際、レオポルドは彼處に一年此處に二年征戰に從ひて閑日なく、家族も亦其跡を追て或はコルシカ島に或は意太利に或は西班牙に赴き、其煩に耐へざれば、レオポルドの西班牙に行くや家族を巴里に殘しぬ。時の紛亂如斯く、父も亦常に家にあらざれば、小兒の敎育も自づから亂れ勝ちとなる可き筈なるも、ユーゴの母は自己の識見あり氣力男子に劣らざるの婦人なりけれ



ユーゴ並に其師

ば、ユーゴ並に其二兄の教育に寸分の懈怠あらしめず。後園に果樹あまたあり、果實壘々たり、母は之を取ることを禁じぬ。ユーゴ問いぬ「サレド母上、若し果物の落ちたらば如何に致す可き」。「落ちたるまゝに捨て置く可し」。「腐れかゝる樣にならば」。「腐らし置けよ」。然して庭上の果物は取る人なきが爲めに腐れぬ。隣家に天文學者アランド住せり、家と家との間に隔ての墻のなければ、彼天文學者はユーゴ家の小供等の或は來りて吾を擾すことあらんかと思へつゝ、墻をしつらはんとせしに、ユーゴの母は斯く言へり「其事なれば御心配ある可からず、よく戒め置きて候へば決して御妨は致すまじ」と。墻は設けられず、然して天文學者の庭にはたゞ一個の小さき靴あとも見へざりき。教育の嚴正なりしこと推して知る可し。

然も小供は小供也、ユーゴも折り〳〵は騷ぎ遊びて其兄と兵隊の眞似をなし、ズボンを裂くこと折々なり。あまりズボンを裂くことの甚しかりしかば、母は此たびズボンを裂きたらば騎兵のズボンを着さす可しと叱りぬ。二三日の後、ユーゴは小學校より歸るとて、途に一隊の騎兵に逢、其軍服の日に輝やきて限りなく美しきを見、保姆に問へり、「此兵隊は何と云ふ兵隊なるぞ」。「騎兵」。ユーゴは打驚きたるさまなりしが、其時は一言も云はざりし。家に歸りて暫くする程に、母夫人はあまり音もかもなき靜さに何を爲しつゝあるやらんと覗き見しに、ユーゴは庭の隅の岩の蔭にて滅多とズボンを引き裂き居たりしかば、母夫人打腹立ちて「何をするぞ」と叱すれば、小兒は靜に答ぬ「母上、イザ騎兵のズボンを着せてたまわれ」と。またユーゴの躰面と云ふことを重ずるの深かりしは、五つばかりの頃或時いたく母の折檻を蒙り止め所なく泣き出せしに、父之を聞きつけて嘲弄的に「少女子！ 少女子！」と呼び、少女子の服着せてチユイロリーの園に連れ行けと保姆

に命じければ、五歳のユーゴは限りなくはづかしがりて、此れより一切泣くと云ふ事はなかりしといへり。「吾は投石器中に惟一箇の石を有す、然れども此石や好箇の石也、此石は正義也、渠は兵士を有す、彈丸を有す、權威を有す、富を有す、好、吾は赤手空拳を揮ふて渠に當らん」と叫びて奈翁三世の前に膝を屈せざりしヴイクトルユーゴも、思へば眞空に俄焉として湧き出でし幻影にはあらざりけり。

好んで物を學び問を發するは其天性に出で、其學才に到ては素より天禀と稱す可く、五歳にならざる中より自ら字を讀むことを知り、後ち父の後を趁ふて西班牙に赴くとなりし時、其母ユーゴ及其兄に命じて三ケ月間に西班牙語を修得せしめんとせしに、六週間にしてよく之を使用し得るに到れり。西班牙滯留はユーゴ十歳の春より十一歳の冬に及び、此間はマドリツド府の貴族學校にあり。ヴアヂルの羅甸詩を翻譯しては教師をして及ばざるを羞ぢしめ、「我大皇帝」を辯護しては西班牙の小兒と屢ば鬪爭するなど、此等の外には格別變れることもなくして、頓て西班牙の形勢日にまし危くなりければ、ユーゴ兄弟母に挈へられてまた巴里の舊居に歸りぬ。

家は巴里の尤も寂寥たる方角にあり、もとは某庵と稱せられし家にて、庭園廣く、此處には木立しげき林あり、彼處には幽花の草の間に笑ふあり、蝶舞ひ鳥歌ふ、共に田舍の趣あり。時は奈翁の勢已に絶頂を過ぎてや〻傾きかけたるの際にして、歐洲には兵馬の塵滿ち滿ち巴里も亦暫らくも寧日を見ざりしが、ユーゴ兄弟は此靜かなる家に母と共に住みて、外に出で遊ぶことも稀に、天主教僧侶にして身分の貴からざるに似ず學識を具へたるラリヴイエー日々來りて此處に課を授けぬ。

母夫人は智育德育をもて足れりとせず、猶も其子供の

筋骨を丈夫にせむと、強て庭園の仕事を此に課し、また文學は單に此にのみ依賴す可き生計の道にあらずとて、手工を敎へ大工わざを習はしめ、室の壁張りなど



未來のユーゴー夫人

課餘の鬱散として爲さしめたり。如斯く母の敎育は嚴正にして、敎師の性質は僧侶の事とて寧ろ沈鬱に傾き、外に出づることも稀なれば、小兒は疾く此退隱の生涯に倦むべきを、左なきのみか此小兒をして園內の一花一草も終生忘るゝ能はざるの感を催さしめしものは、蓋し其故あるなり。

ユーゴの母と共に此の寂寞たる家に住せし二年の間、おり〳〵庭園に遊びに來る十三四の少女ありき。其姿の見る毎に此小兒の心の鼓動は一入高まりぬ。後年ユーゴの「死刑囚」を著はすや、斷頭臺に上るを待つ人の吾少年の事思ひ出でゝ述懷するの條に記して曰く、

小さき西班牙生れの少女、眼大きく、髮長く、橄欖色の皮膚、紅の唇及頰、年は十四歲、名をペピタと呼びぬ。我等の母上は共に庭園の中に走り戲れよと宣ひしも、我等は出で來りて共に步みぬ。母上は遊べよと宣ひしも、我等は寧ろ語るを好みぬ、同年然も異性の子供同士に。

一年あまり吾等は常に共に遊びまた喧嘩をなしぬ。予は木に生れる林檎の尤も熟せるを取るとてペピタと爭ひ、鳥の巢を吾ものにせむと彼女を打ちたることもありき。彼女は泣きぬ、而して余は云へり「よい氣味也」と、二人共走つて母上に訴ふれば、母上は表てには予を叱りながら、內心には何れの母も吾子こそ正しけれと思ひぬ。

今や彼女は予が腕に倚りつゝあり、余は意氣揚々と

してまた愉快に思ふなり。我等は靜かに歩み、低き調子にて相語る。彼女手巾を墜しぬ。余は爲めに之を拾ふ、手相逢ふて交ゞ震ひぬ。彼女は余に語る、小鳥の事を、彼處の樹背に眞紅に沈みつゝある夕日の事を、彼女の校友の事を、其衣服を、其リボンを。我等は尤も無邪氣なる事を語る、シカモ互に面を紅ふするなり、彼兒今や少女とはなりぬ。

時は夏の夕、我等は園底の栗の樹の下にあり。彼女余に言ひぬ「其處に坐したまへよ、日は猶暮れず、イザ共に書讀まむ、御身は書を携へ玉ひしや」と。

余は「スパランザニー旅行記」の第二冊を携へ居たり。手當りに書を開きて、彼女の傍近く寄りぬ、彼女は其肩を余が肩にもたせ、斯くて我等は同じペーヂを讀みはじむ。頁を轉ずる前には、彼女常に先づ終りて余を待ちぬ。彼女の才は余よりも敏なりしなり。彼女は常に問ひぬ「御身は讀み終りしか」と、余は纔かに讀み始めたるばかりなるに。

我等の頭は相接し、髮は相混り、呼吸は互に相通ひて、唇も亦相逢ひぬ。

再び讀み始めむと欲せし時は、空には星點々せり。

「オ、母上母上」彼女は家に入りながら斯く叫びぬ「我等は斯くも走りてし」と。

余は默然。

余が母上は言ひたまひぬ「見や、御身は何も言はぬよな、御身は何か物悲し氣に見ふるなり」と。

余が心には喜びの滿ちしなり。

余は此一夕の事を吾生の末日までも記臆す可し。吾生の末日までも！

「死囚」篇中の此一節は即ち作者自身の經歴也。此節中の少女假名はペピタ、其實名はアデル、フオセーと呼びて、即ち未來のユーゴ夫人なりし。

文藝

嬰兒（つゞく）

一　一生

彼は刑法を心得居りながら罪を犯すもの也、彼が足にて書籍を蹴散らし或は足をドンブリ鉢などの中へ入れたる時、「ソンナ事すると……」と言ひて睨めば、他は直ちに片手の拇指と人さし指とにて他の片手の甲を摽ねるなり、彼が常に惡事を爲す毎に、ソンナ事するとコーするぞとて手の甲を摽りたるがゆゑなり、彼は大時計のある通衢を善く記憶し居れり、數寄屋橋より土橋に到る廣き通りなる八官町に大時計あり、彼れが一たび此大時計を見來るやダーン〳〵と大時計の鳴る音を眞似するやうになり、それよりは數寄屋橋より例の通りへかゝる毎に忽ちダーン〳〵と言ふやうになりたり、或時は銀座通りより時事新報若くは日々新聞の邊を西へ入るとあれど、例の通りへ來れば忽ちダーンと呼ぶ、彼は確に路傍の樹木若くは人家に於て目標を記憶し居るなり、

ある日屏風倒れて彼の身上に被ぶれり、彼は頭角を擊てり、それより彼に向ひ屏風がドタンして何處をイタイ〳〵したかと問ふ毎に、彼は手を擧げて擊ちたる頭角を撫づるなり、

此頃彼が爲し始めたる事は、アヽエンと言ひつゝ胡坐するとなり、パイと言ひつゝ手に持ちたる物を捨つるとなり、アイと返辭するとなり、啞鈴を持ちて躰操するとなり、守女の背にて小便して仕舞へと言へばイヤ〳〵と言ふとなり、エンサカホイ〳〵と言へば荷車を輓く者の如く身躰をゆすぶりて見するとなり、

芝區の親族に矍鑠たる老媼ありけり、この老媼は彼の曾祖母にて彼を愛すると甚しく、彼が行く毎に得意

の諸藝を演ぜしめて、彼の好めるものを饗應せられたるが、今春徹しの病にて三月二十日の夜遂に溘焉彼の世の人となられたり、次いで彼の母は顋下線病にて入院せずばなるまいとて心配せしが、終に自家にて療治する事となり、彼の父も流行感冒に取り付かれて病の床に就きしかど彼は此間に在りて依然として笑顔を保ちしが、無情の天は終に彼をも流行感冒の卷き添へたらしめたり、彼の大に惱みたるは僅かに一日にして其後は左程に惱むとはなけれども、前日の如く坐敷中飛び歩るき踊り歩るくの勇氣を失ひて母の膝にのみシガミ付き居れり、

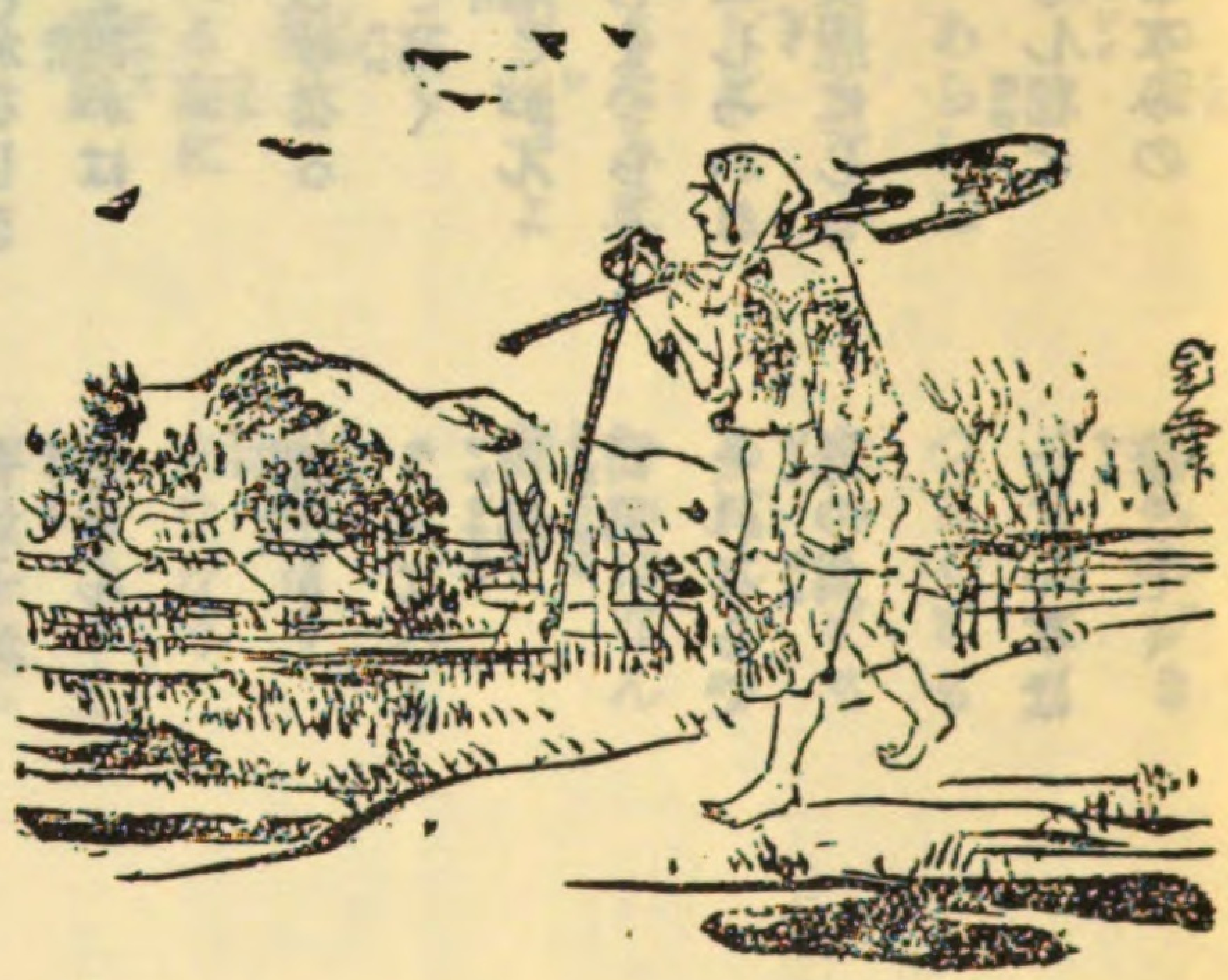
此頃不思議なる事一ッありけり、彼は椽側より滑べり落ちて、何處をも傷かず、ア、エンと言ふ時の如くに胡坐し居たるなり、椽側の下には大なる石もあるとなれば、若しこれにて頭若くは顏を撃ちたらんには、一生傷ともなりぬべく數十日間惱むべきの處なり、天公の冥護と謂ふべし、

春のゆふべ

邵處子

むらさきの
ゆふべの空をながむれば、
もゝ千鳥とぞ飛かよへ。
向ふところは異なれど、
おのが塒に
いそぐ心は同じかるらむ。

すみぞめの
ゆふべの野べを來て見れば、
さとの賤こそゆきかよへ。
向ふところは異なれど、
おのが宿に
いそぐ心は同じかるらむ。



オルリン公の息女

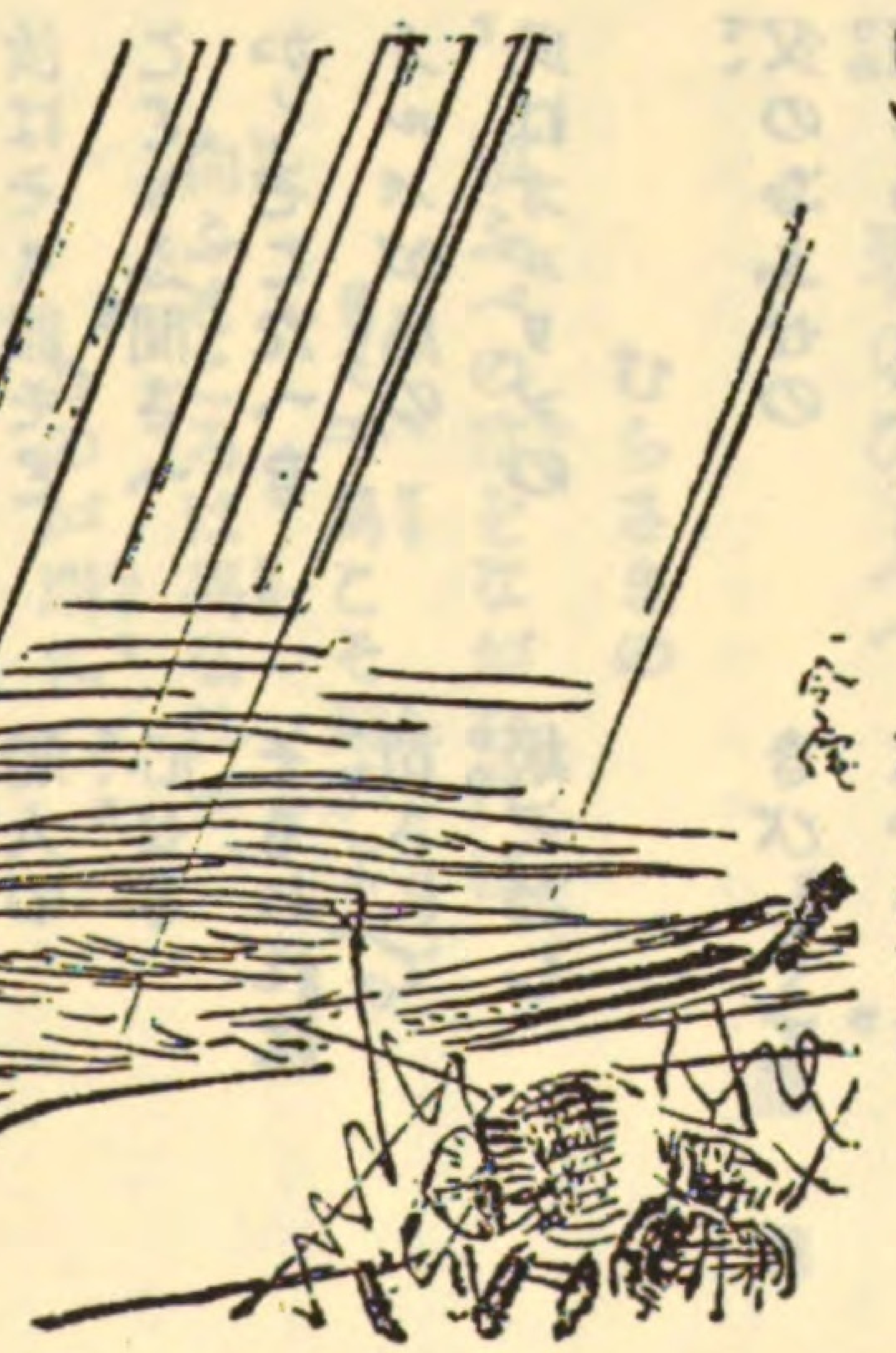
カムベル作
家永ねい子譯

時しも秋の　半頃
いと凄じき　あらしの日
さし行く方は　ハイランド

其方へいそぐ　若人は
聲もとゞろに　叫びけり
やよ渡し守り　わたしてよ
渡さばこがね　とらせてん
とくこぎいだせ　船人と
かゝる暴風も　ことゝせで
この湖水を　渡せとは
汝はそも誰そと　船人の
ことゝふ間さへ　心せき
かくぞこたへき　そもわれは
オルベが島の　司さにて
此はオルリンの　姫ぞかし
父のおふせの　きびしくて
姫もろともに　はやいく日
辛くものがれ　來にしかど
やがて追手の　およびなば

我身の血しほ　はかなくも
ちがやがもとを　そめぬべし
父のつはもの　あとおひて
いとも間ちかく　攻め來なり
あらきそが手に　われしなば
あはれかなしき　吾妹子が
嘆きを誰かは　慰めん
勇ましげなる　渡守り
聲いと高く　うべなへり
いで船こがん　司君
わたしまつらん　司君
こがねしろかね　それならで
汝が美麗はしき　妹の爲
かゝりし程に　いとゞなほ
打寄るなみの　凄まじく

墨かきながす　大空に
物いふ人の　面さへも
いやゝくらくぞ　なりにける



あらしはいとゞ　吹猛り
夜も物すごく　更け行きて
深山おろしか　夫ならぬ
谷間にひゞく　兵士の
足音ちかくぞ　なりまさる
姫はかなしや　おそろしや

えたえぬ聲も　うちあげき
あな船人よ　とくよとく
たとへあらしは　つよくとも
たとへしらなみ　たかくとも
怒れる父に　あはんより
いかれるなみに　むかはなん
はや漕ぎ出でよ　船人と

小船は陸を　出にけり
暴れたる海に　向ひけり
時しも颶風　いやつよく
山もおほはん　志らなみに
船はあやふく　見えにけり

いやあれまさる　波風を
凌ぎ〳〵て　漕ぐ船は
沖の眞中に　いでしところ
姫がちゝなる　オルリンは

我子の出し　濱に來て
あなたを見つゝ　いつしかに
いかりたけれる　其心
嘆とこそは　變りけり

荒波たかき　沖中の
いとゞ危き　波間より
見ゆる我子は　傷ましや
片手は助け　こひげにて
片手はきみに　縋りけり

父はかなしさ　苦しさに
聲もをしまで　叫びけり
かへれよかへれ　波越へて
我は司さを　ゆるしてん
あなわが子よや　我子よと
あせれる父の　呼び聲も

水の泡なる　しら波は
濱邊に高く　打ちよせて
助けん道も　かへるさも
なみ間に船は　かくれけり
あはれかなしく　殘されし
父のなげきぞ　おもひやらるゝ

彼等

英俊世に出てゝ才華方に發揚す、此時に當て人生誰か復た凋落の秋あるを知んや、去れども凋落の秋は竟にあるなり。世變歎ずるに堪ゆべけんや。

彼等は何ぞ、

彼等は人類の野の花なりき。曾てベーベルの塔下にも發き、曾てナイルの河畔にも發き、世界のあらゆる野末は皆發きて、總てのあらびたる人の頭に翳され、其小さき花瓣[illegible]の[illegible]に世のあらびたる人を覆ひき。彼等は實に愛の種子なりしなり。乾ける野は彼等の花瓣より滴りし雫に因て濕されき。

彼等は煖かき春の日に當りて長じぬ。彼等は今神の形態に似るべく勉めぬ。彼等は美の粹となれるなり。一點の靈火天上より落ちて彼等の罪なき心機に觸るゝや、彼等は忽ちに野の花の如き無心より醒起して有情となるなり。

天下に美はしきものはあるべし、去れども復た此時の彼等よりも美はしきものある乎。天下に可愛ゆきものはあるべし、去れども復た此時の彼等よりも可愛ゆきものある乎。

彼等は無邪氣なる躰を以て始めて意味ある愛の光を包めるものなり。彼等の躰は方に愛の光を以て透き徹れるなり。

此の瞬間に於て彼等は一種の天使なるなり。神は彼等を擇べり。彼等は幸福の摸型なり。彼等の聲は能く天上の樂調に合へり。彼等の擧止は能く神の夜遊の逕態

を摸せり。彼等は其眼の澄麗なるが如くに其心も澄麗なり。彼等は其態度の玄美なるが如くに其希望も玄美なり。彼等の肩にかゝれる髪は春の海の漣漪を打たせて垂るゝなり。彼等の口を洩るゝ香氣は薔薇の蕾を合めるなり。

彼等は玉花を刻み出せる電燈の如く、僅に温情を點じて忽ちに燦爛たる光耀滿堂を照すなり。彼等が犀心より放つ奇しき光の露は衆生を無垢清淨に洗禮せしむるなり。麗波の灑ぐ所、如何に獰惡なる人も其害心を失ふべし。如何に奸曲なる人も汝の小兒にかへるべし。譬ば春雨の如く然り、譬ば春風の如く然り。

去れども彼等も同じく弱き所のなきにしもあらざれば、若し彼等が身に惡魔の息の露ばかりもかゝらん乎、彼等の玉の如き麗質は一點の曇り出で來て、涙の雫滴るべし。凋零衰落の命運の風は是より始めて彼等を吹くなり。世に妙へなる天の羽衣も涙の滴りに袖濡れて早や名を染めかへて惡衣となり、通天の翼は折れて彼等は忽ちに人寰に墮落すべし。人寰は浮世なり、時に春秋あり、人に正邪あり、情緣には輪會の羈絆あり。唯笑のみ有て復た涙なき天國に如かず。

請ふらくは我れ世の罪なき彼等の爲めに祝らん、願くば乙女子の愛に永久の生命あれ。願くば乙女子の幸福に長への存在あれ。

今年より春知りそむる櫻花
散るといふことはならはざらなん。

二日旅行（承前）

行行生

鎌倉は相摸の南部にして、南東は三浦郡海中に突き出て、江戸海の海門をなし、武藏の久良岐郡と腹背相倚り、北より西は鎌倉郡中の諸村と隣りぬ。南は名にし負ふ相摸灘にして瀕海を由井が濱とす。

山岡西北東を繞りて天然の城郭を形づくり、其間の平

地東西一里一町、南北一里四町十間、周圍六里二十五町四十間にして、面積は一方里半あるなり。山を堀りて道を通じ、所謂七切通あり。名越切通、以て南東三浦郡に通ず。朝比奈切通、以て武藏の金澤に至るべし。巨福坂切通、鎌か谷切通は大船に行く道なり。假粧坂切通は梶原村に越べく、大佛切通は藤澤往還に當れり。而して極樂寺切通は鎌倉の西門として、往時其



京師に向ひぬる大路の發程なりき。

我等はまづ七里が濱の濱邊より、極樂寺村に入り、砂路を行く車の音なし川を打渡り、誰が袖が浦、稻村が崎を右手に見やりつゝ行く程に、荒村茅屋の間に入りぬ。

元弘の其昔新田義貞が上野武藏を打徇へて、大佛極樂寺の切通より攻入り、北條高時を滅ぼしゝ當時、此手の大將大舘又次郎宗氏が打死したりしは此地にして、路傍一基の小石は彼が主從十一騎の死處を指し、長く不聲の哀詩を吟ずるなり。

道の左なる小陵の陣鐘山に傍へる所に一樹の松あり、日蓮が袈裟掛の松とぞ言ふ。

去る程に極樂寺川を渡て、極樂寺の前を右に折れ、所謂極樂寺の切通を越ゆれば、はや鎌倉の坂の下村にと着きぬ。路の傍に名高き星の井あり、鎌倉十井の隨一にして、是れなん星月夜鎌倉山の名の起りぞと車夫敎へき。

行くことしばらくなり、道の左に少し入りて五靈社といふがあり、鎌倉時代に啼兒を止めし勇者鎌倉權五郎景政を祭るとなん。

道は更に長谷村に入りぬ。

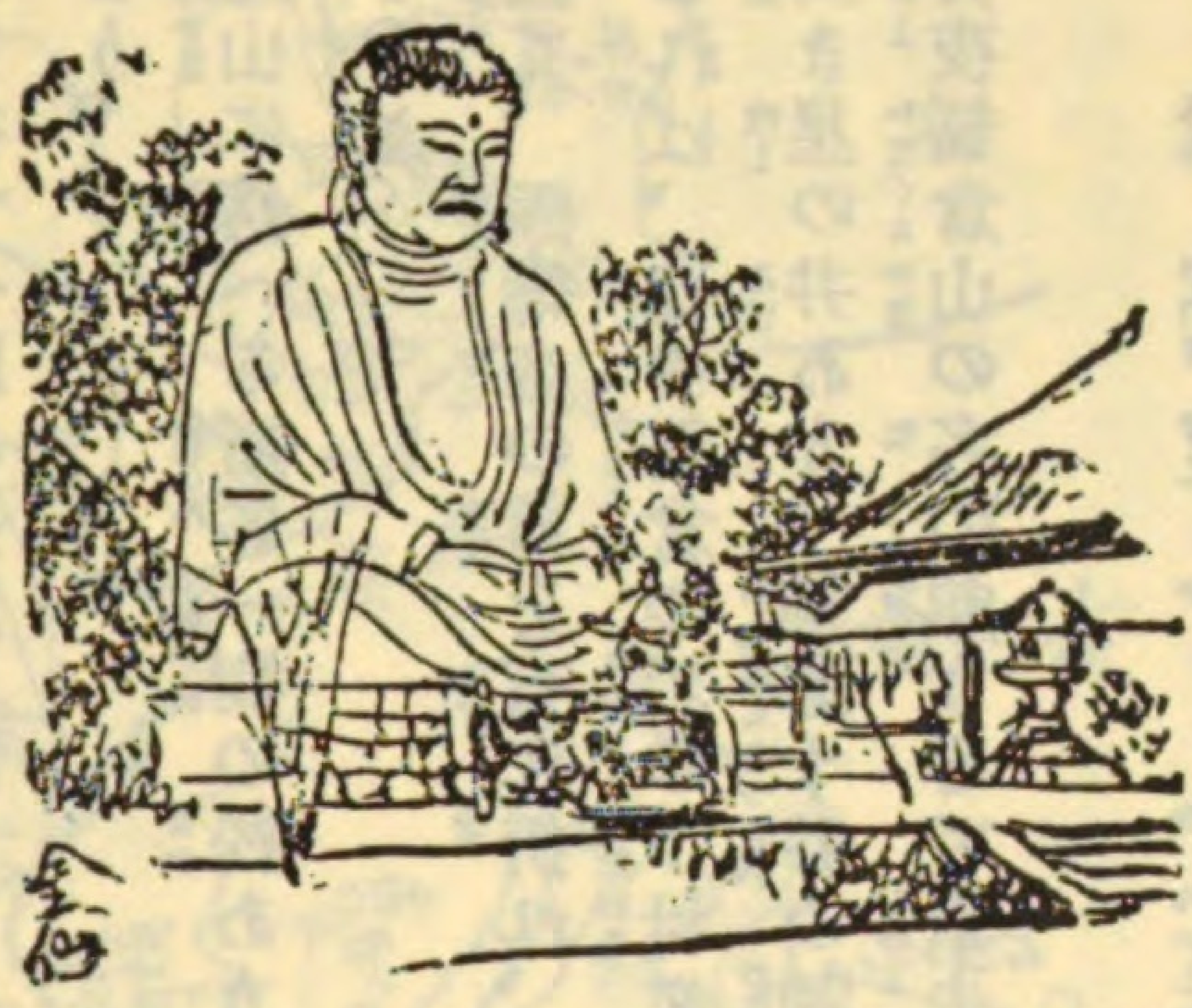
海光山長谷寺、阪東四番の札所といふ。身長三丈三寸の木造觀音あり、寺僧曰く、抑ゝ此觀音は其昔元正天皇の創立ましましゝ所にて、養老五年の彫造に係り、大和の國は長谷寺の觀音と同木同作なり、此像海上に漂流すること十六年、天平八年引き揚げて當寺に安置し奉りぬと。彼は一種のこはいろもて見たるかの如くに斯く語りぬ。

寺下は民舍若干あり、小市形をなす。旅亭あり、三橋與入といふ。我等はこゝに宿からんとせしに日猶高ければ、大佛なりと見たまはずやと勸むるにまかせ、其儘車は急がしめき。

道左に折れて藤澤往還に入る、所謂大佛坂に向ふなり。長谷寺の北に當れり。

大佛は總國寺の舊跡にあり、青銅の盧舍那佛にして、高さ五丈周圍十六間二尺なりと云ふ。我等は案內せら

るゝまゝ、腹中に入りて之を見き。像は源頼朝の發意にして、四條の御門の勅により、藤原の頼經頼嗣及び宗尊親王之を助けたまひ、建長四年に鑄造したりと案内者言へり。



車は還りて稲瀬川を越へ、田間を行き行く、これを長谷往還とす。藤九郎盛長の宅趾あり。神明小路大町小路なといへる名も殘れり。願ふに此の邊りは往昔の市街にてやありけん。此時我れ車上にて思ふやう、一時日本政府の所在として、繁昌限りなく、東八國は天下に敵し、鎌倉は東八國に敵すとまで言はれし所なれど、去り迚地勢餘りに狹き心地すと。

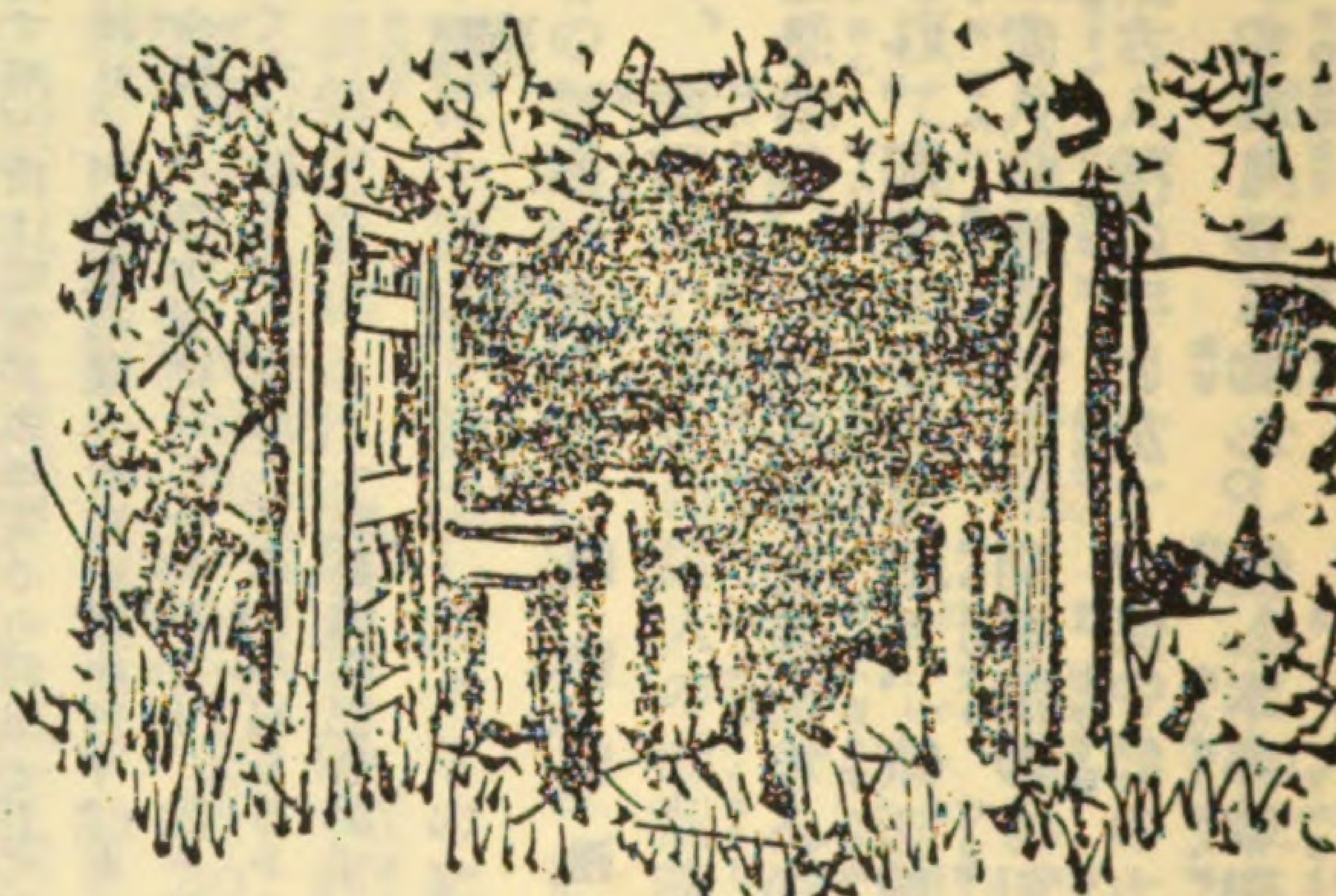
それより行て一の小川を渡れば、裁判橋と謂ふ。鎌倉政事堂のありたる所にして所謂問注所の跡なり。上總介直方或は諏訪千葉等の宅趾は其左にありき。谷に入りては平經時守時なとの跡もあり。

鎌倉ステーション近く行けば今廣小路と名く、頭を擧げて源氏山を見るべきなり。源氏山は扇が谷村に屬し、源義家が奥州征討の日旗を此山に樹てゝ坂東勢を集めしと傳ふ。又旗立山ともいふ。長路關山何日盡。即今一聲の鐵笛にて五十三亭を飛下る道も此頃の事とて、征戰萬里の旅なりき。山風に吹き靡かせし白旗の下に集りつる坂東武者が、山又山の雲を踏みしめ、鎧の袖を打拂ふて關山の月落ちかゝる曉に起き、兜の星の夜をこめて、遙々出立ちぬる其勇ましさ。奥羽邊境を討平げ、勿來關外春暮んとするの時、花は征衣を襲て看繍に似たりける昔、亦忍ばるゝ哉。

ふく風をなこその關と思へども　　源義家
道もせにちる山さくらかな

其一端南に盡きて平地となる所に望夫石なり、畠山重保の妻が遙に夫婿の戰死するを望みつゝ絶泣せし所な

り。長く斷腸の痕を留めぬ、山下には高名なる彫刻家運慶の居迹あり。又高名なる刀工正宗の宅趾もあり。而して山に傍ふて實朝の墓あり。政子の墓あり。源家三代の天下、尼將軍一世の意氣、今は唯春風ぞ吹くなる。



鐵道線路に沿ひて丘陵間に入れば、右に扇か谷上杉の邸趾、鎌倉管領の跡のみ殘り、左に五山第四の壽福寺あり、又戰國の名將太田道灌の屋敷跡あり。更に行けば景清の土籠あり。假粧坂とて名にし負ふ歌舞の地の雜樹のみ茂れるあり。

葛原岡は元弘の張本人右少辨俊基朝臣の

古來一句　無死無生
萬里雲盡　長江水清

てふ一頌を留めて空しくなりし跡。落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻かり、紅葉の錦を衣てかへる、嵐の山の秋の暮、一夜の旅ものうかるべきを、遠くあづまえびすに捕はれ來て、終に果敢なくなりしぞ痛はし。」

海藏寺に底脫井あり。上杉氏の尼が參禪し、此の井水を汲みて投機し、詠ずらく、

賤の女がいたゞく桶の底ぬけて
ひた身にかゝる有明の月。

故に底脫の井とは云ふとなん。

淨光寺には冷泉爲相の墓相馬の墓などあり。

斯くも我等は引きかへして鶴岡の祠の傍なる一旅亭に投じぬ。

（未完）

音樂

四竈訥治氏、僊華と號す、現日本の音樂家中に傑出したる士なり。音樂雜誌は實に氏が出す所。氏は四者其多年苦心の結果として新に和洋折衷の一樂器を作れり、四絃琶形最も自在の音を發す、名けて僊華琴と謂ふと云ふ。余曰く、日本音樂界の一美事なり、盍ぞ我が家庭雜誌の爲に之を語て大に新日本の家庭に其新聲を鳴らさゞるやと。發明家曰く、諾。　家庭雜誌記者識す

僊華琴

四竈訥治

第一　緒言

人心を清淨ならしむる音樂、感情嗜好を支配するの音樂、一たび印度に生れ、印度より旅立して、東西兩洋に渡るや、一は高加索人の手に於て、開發的の方針により發達し、一は蒙古人種の手に於て、保守的の方針によりて維持せられたるもの丶如し。蓋し本邦音樂の如きは、蒙古人種が受得せし支流のみ。左れば兩洋音樂發達の程度に凡そ八百乃至九百年の甚たしき差異あるも偶然にあらざるべし。

倭民族は其特性として優美に富み、殊に音樂の美術に至ては大に發達し、上は雲上の雅樂より士家の箏曲琴曲町家の三絃其他清樂、神樂、能樂、大神樂の類に至るまで其種數も實に夥だしく、如何なる山間僻地に至るも絃歌弄管の音を聽かざる所なきが如し。斯く其普及したるに關はらず、泰西音樂より其程度の低くして大に後れたりし所以のものは、顧ふに之を婦女子或は廢人等の專有遊戯物として放棄し、毫も有識者の之を顧みざりしが故なるべし。爲に我が音樂は久しく幼稚の域に在りて、眞正の高尙なる音樂にまでは發育せざりしのみならず、却て敗德卑猥なる俗樂の發達を促がし、大に道德を亂し風敎を害するに至りき。而して明治文明の潮流吾が海内を洗滌するや、泰西の音樂は一種の新嗜好新感情を以て本邦人の腦裡を刺擊し、人爭ふて此を捨て彼を學び、一たびは徹頭徹尾本邦樂を害物となして之に代るに泰西樂を以てせんとまでせしが、其反動は却て俗樂の氣焔を再起せしめたるものなしとせざるなり。其の源因たる、吾邦の音樂を

改良せんと謀りし者の、其國情と音樂の程度とに頓着せずして急劇なる策を施したるに由るものにして、壯者が幼者の手を挽て壯者と共に長途の歩をなさしめんとせし如く、又羽なき雛鳥に高飛せしめんとしたるが如し。

泰西の音樂は、學理より組織し、實際より經驗し、絕妙なる複重の和聲を以て美妙の趣味を感ぜしめ、樂器の完備せる、律の整然たる、以て人心を統一せしむべきものありと雖ども、元と是れ彼等白皙人の國狀嗜好感情に適すべき彼等の智識が表出せしに外ならざれば、音樂の性質より言はゞ固より發達したるものに相違なきも、然れども其儘之を容るれば恐らくは本邦人の嗜好感情に符合せざるべし。又吾邦一般の生計の度にも適せざるなり。假令ば銀坐街の石造家屋の如く、其建築壯觀堅牢にして風雨火災の憂少なく、外觀よりすれば全く西洋風に相違なしと雖も、其實用の便に至ては、幾分か折衷を加へ、中には疊を敷き襖を建つる如き國風を存せざる能はざるに同じ。音樂に於るも亦た國狀の許さゞる所と未だ其眞境に達する能はざる所と存ず。

斯く泰西の音樂は、其組織學理的にして經驗にも富み、其趣味の高尙にして完備せる、遠く吾樂の及ばざる所なるのみならず、本邦在來の樂は到底永く文明界に維持し能はざるものとせば、勢ひ之に改良を加へて邦人に適合すべき新音樂を編成し、以て着々其度を進ましむる策を取らざるべからず、而して之を期せんには、先づ彼の長所たる學理を應用して、之を邦人の嗜好と使用とに適應せしむべき新樂器なかるべからず。

兵器は武家の要具なり、縱令上には智勇兼備の良將あり、下には幾千萬の軍兵ありとするも、若し兵器にしてあらずんば、戰は能はざるべし。樂器の樂家に必要なる、猶ほ兵器の兵家に於るか如きのみ。

吾邦に於ては樂器の種類固より多く、其名稱すら擧て算ふるに遑あらざる程なれども、多くは簡短に過ぎ、粗造に失し、音律の區域及び音量の度甚だ狹くして、完全の名を下すべきものは殆んどあらず。僅に三味線

の能く發達したるものありと雖も、其彈法と歌詞との一種言ふ可からざる習慣に染みしが爲め、君子は之を聞くを耻づるなり、以て音樂改良の具となし難し。されば迚「ピアノー」の如き「オルガン」の如き、完全にして善良なる樂器とはいへ、之を本邦一般の需用に供せしめんとすれば、値貴く、且一として之を外國より仰がざるを得ず、到底有福者の少數が之を得るに止まるべし。然らば多數の人は猶不完全ながらも値の廉にして携帶に便なる古來の樂器を弄せざるを得ず。

僊華琴は是の故に作れり。邦人生計の度をはかれり、需用習慣の便をはかれり、嗜好人情の適應をはかれり。本邦在來の樂器たる琵琶、箏、三絃、月琴等の仕組に、泰西樂器の帝王なる「バイオリン」風琴等の音律組織を應用し、又完備せる泰西樂譜を附して容易に彈じ得べからしめぬ。以て泰西樂を奏すべき也、以て本邦樂を奏すべき也、又以て明樂をも奏すべき也。實に一器にして何種の樂をも自由自在かなで得る也。

彼の長を採りて文明の趣味を導けり。我が長をあつめて舊來の感情嗜好を惹けり。

苦心數年、本年一月を以て始めて世に示しぬ。

仙花琴の構造は、胴を大にして音量を廣大ならしめ、絃數を殖して音度の高低を倍さしめ、而して定規の音律は和漢洋の音階を含み、形躰の組織と彈法とは本邦固有の遺風に適せしめたる所多く、又洋風に形りたる所もあり、以て東西洋互の便利と長所とを採用したり。本と是れ今日吾邦音樂改良の時期に際し、邦人生計の度智識の度感情進化の度を鑑み、之に適應せしめて、以て新に音樂進歩の階級を世に作らしめんとするの微意。」若し夫の之が使用法、製作の材料、寸法、調絃法、之に用ゆべき歌曲の樂譜等は、請ふ詳に圖解して之を次回に説かん。

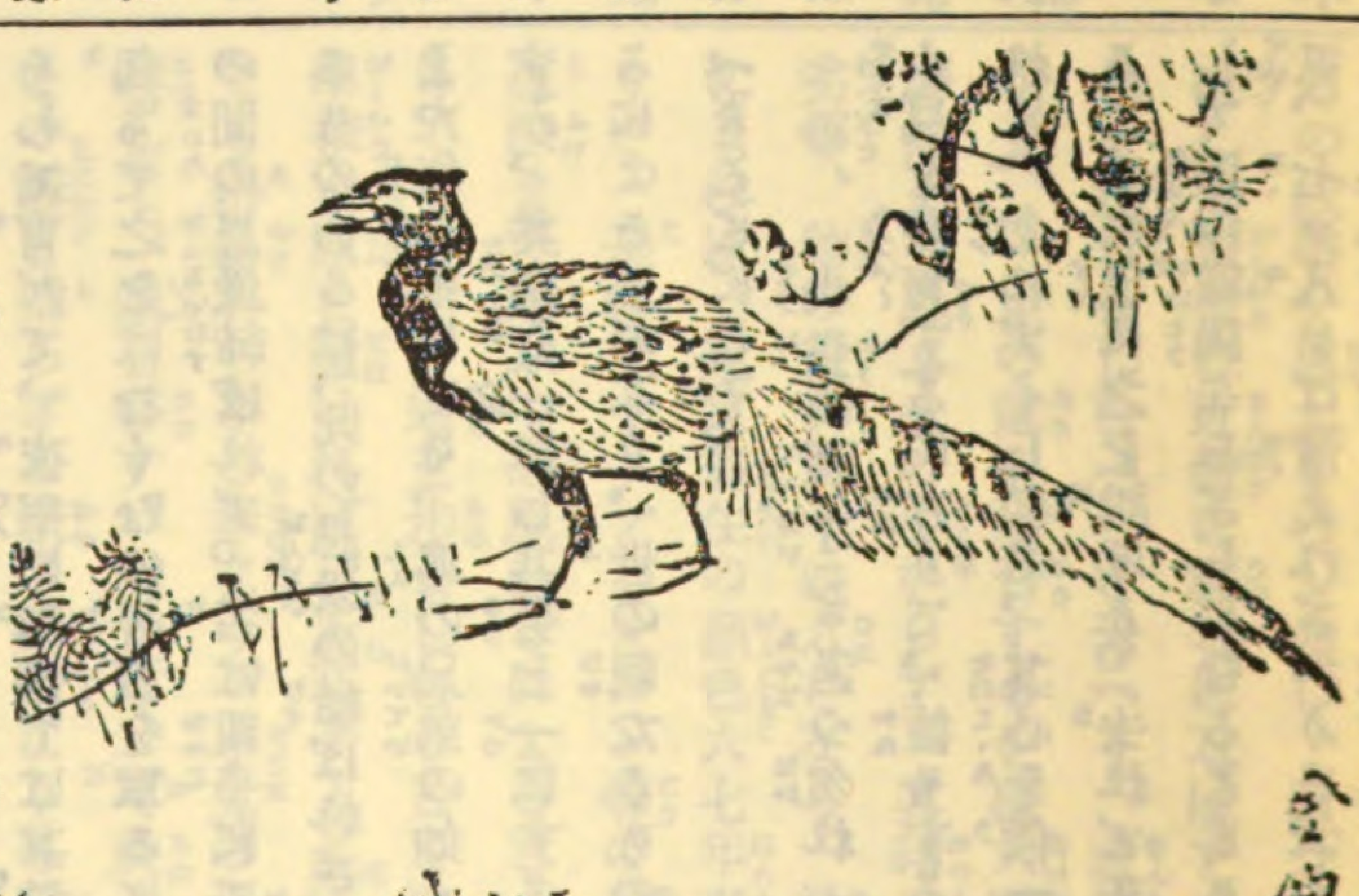
家政

育兒小話

偏愛を戒しめよ

昔し支那の鄭と云ふ大名の后は、其子を生みしとき目をあけて生まれしとて、いたく其子を惡み嫌ひ、それより親子の間柄よからずして、國の亂となりしと云ふことあり。如何に大名とて、よもや親子の間柄にはかゝる事もあるまじと、かね〳〵思ひしが、此頃知れる人の家に宿ること數日にして、かゝる事も、實際あり得べき事なるを知り得たり。

其人の家は極めて富み、且つ代々學問を重んずる家にして、當主となりては、學問の力をさ〳〵近郷に並ぶものなし。其妻は或る寺院の娘なりしが、此家にとつぎてより已に十五年を經過して、數人の子女を生みたりしが、其長男が一歲の哺乳期を經過するや、間もなくまた次男を生みたりき。是れ俗に云ふ通し子にて、



母にとりては中々に手數の事なれば、遂に次男は乳母を傭ふて、養育せしむることとなりしが、近隣に乳母なきより遠き友人に托して撰ばせしに、其容貌醜惡にして、且つ野卑なりとて、母はいたく此乳母を厭ひしも、他に代りなきより、之を忍びしが、不思議にも此乳母に托したる次男の目、甚だ大きくして、恰かも繪にかきし團十郎の目の如くな

りしかば、母は乳母と共に此次男を厭ふに至れり」

歳月は矢よりも早く、今は早や此事ありし時より十一年の事となり、親愛せらるゝ長男と、厭嫌せらるゝ次男とは、同じく學校に通ふに至りしに、子供心にも、最早や己が曾て母に厭嫌せられたるを記臆すれば、何となく肩身のせまき心地して、萬事に控へ目となれば、母子の間、自然に遠かり、母が折にふれて教訓すれば、教訓は嫉惡の様にきかれ、次男は長男と争ふべきものにあらずと服從を敎ゆれば、是れ偏愛なりと解せられ、今は純然たる繼子となれり。

固より此次男とて、生來完き人にはあらず。されど其判斷力の强よく、且つ負けじ魂の强よくし、氣根のあり所は、天晴れ中々の性質ありて、能く之を導かば、一廉の人物となるべきこと極めて確なり。然るに此くまで繼子根生とならしめたるものは、要するに母の偏愛によらずんばあらず。

右は極めて一家の事にして、他人に關係する事にあらずと雖も、世間往々其子を偏愛するもの少なからざれば、注意の爲めにもと記しぬ。且つ注意すべきは、如何に多忙なりとて、己が子は成るべく己が手にて育つるをよしとす。親子とて名ばかりにて、親しく手を下ろして育だて、夜半に起きては其泣をしづめ、寒夜に起ちて之をはごくむの勞苦を取るにあらずんば、親子の間の恩愛結ぼれず。名は親子にても、極めて冷々たるものあるは、此の恩愛の結ぼれざるによるものなり。また從兄弟にても、眞の兄弟の如く親しきは、一家にすみ、其樂を一にし其勞を一にするより、恩愛の結ぼるによるものなり、世の親たるもの、よく〳〵注意すべきことにこそ。

小兒の天才を過つ勿れ

小兒を養育するに方りて、彼もする勿れ、此もする勿れと、勿れずくしにて、其心を餓へしめざるの必要なることは已に之を説けり。去れども之と共に、小兒をして虚浮輕譟ならざらしむることもまた必要なり。大抵、七ッ八ッは憎まれざかりと云ふ諺の如く、六七歳の頃は物事を覺ゆること速にして、よく〳〵之を制す

るにあらずんば、意外なる厄介物となるべし。小兒歡育に經驗ある老翁の言ふ所によれば、人間一生の幸不幸は此の六七八歲の間に於ける、兩親の敎育如何によると云へり。此言餘り甚しと信ずるものもあらんが、少なくとも人物の重々しきと、輕ろ〲しきとは、此間に生ずるもの丶如し。六七歲の頃は、天才ある小兒ほどとかく醉狂したる如く、餘計なる事を語り、彼は大食なりと云へば好みて大食し、彼は多辯にして百舌の如しと云へば强ひて多辯を粧ふことあり。是れ小兒の兩親が欠點を云ひながら、暗に其の戲を喜ぶが如く見ゆるによるものなれば、兩親たるもの、此る塲合には儼然として自ら威を持すべし、去らずば天才ある小見をして、遂に滑稽家に終らしむべく恐るべきことなり。

小兒の健康

此頃我朋友、其子を兵學校に入れんとしけるに、其兒が家と兵學校は餘り遠ければ、願くは學校の近傍に移轉したしと云ふにより、兩親も然らばとて其近傍に移轉せんとし、昔し孟子の母が其子のために家を移したるの故事を思ふもの丶如し、因つて余は之に諭して、決して學校の近傍に移るに及ばず、一里位の路は成るべく步行せしむべしと云へり。近年書生の風儀惰弱となり、一里の道を步行するをば大難事にでも出合ひしが如く、思ふもの少からず。其結果、顏色蒼白、肉格劣等、物の役にたゝぬ人となる。注意深き觀察者の言によれば、東京書生の顏色六七年來一層蒼白を加へたりと。是れトラムプ、カルタ等の遊の行はれし以來、夜深まで遊ぶの悪風あるによると。去れば、小兒は勘めても一里の道を步ましむることは、容易にはあらず、學校と家と遠ければ、是非なくも步行すべければ、求めても得易からざる幸なり。小兒の步行を難澁ならんと察して、家を移すが如きは、可愛き子には旅をさせよとの諺を知らざる親の痴情なりと言ふべし、

コンデンスミルクを用ゆるの注意

乳少なき母は、コンデンスミルクを用ゆることとなるが、之につきては大に注意すべきことなり。大抵のミルク

の鑵には、小兒の用ゆべき分量を記しあれども、極めて日本人に不適當にして、其通りにせば往々にして便通をあしくし。或は乳をもどし遂には發熱するに至ることあり。それより遂にはコンデンスミルクは不可なりとて、用ひざるに至ること少からず、よく〳〵注意すべきことなり。

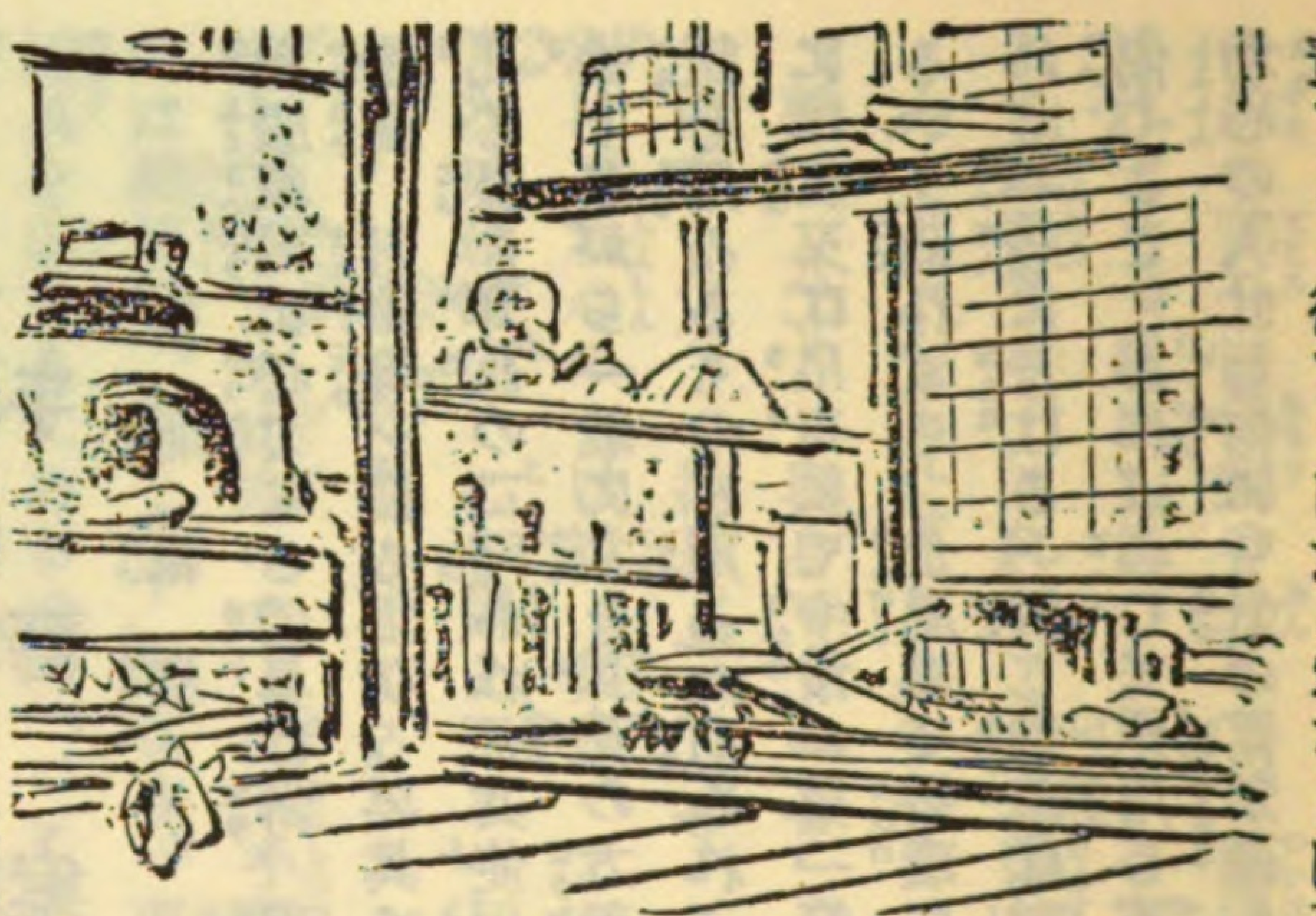
今ま經驗によりて日本の小兒に適當する分量を記さんに、生れてより直に用ひんにはブリキの小さじ（下圖）の大きさなるものを用ひて、平らに乳を盛り之を湯のさましたるものすこしばかりの中に溶解し、よく〳〵かきまわして後に與ふべし。一ケ月も經過したる子には、漸々乳も水も增加し、三ケ月も經過せば、之を增加して乳はさじに山もりにし、水もこれにかなふほどとし、此割合にて進むべし、此より以上は大抵經驗にて分るべし。



よく〳〵注意すべきは、乳をすくひ取る小さじを、極めて清潔にし、且つ乾燥ならしむることなり。若し此事を怠らば、乳は腐敗して役に立ぬものとなるべく。乳は滋養品なれども、一旦腐敗せば、乳酸とて人を殺ろすの毒藥となるべければ、此事は一切母たるものゝ直接に管理するを可とす。

コンデンスミルクに數種あり、其價は一罐十九錢位より、二十八錢に至る。中につきて亞米利加製は價高くして、歐羅巴製は價廉なり。是れ歐羅巴製は赤道直下を經過すれば、腐敗の憂あるを以て也。然れども歐羅巴製とて必ずしも腐敗するに限りたるものにあらざれば、適宜に用ゆべし。而して何れの品にても罐を開かんには、トタンにて封じたる所を開かずして、他の處を開くべし、且つ乳には決して銀色したる鉛のさじを用ゆべからず、鉛は何事に用ひても毒なれども、乳には殊に有毒なりと知るべし。

臺所の注意一二



豫てより待ちうけたる客ならば菓子には困らざれども不意の客には菓子なきに困ることあり、またかねて菓子を貯へをくも小兒の多き家にては何時か知らぬ間の食ひつくさるゝことありて用を欠くことありかゝる時には手輕るく菓子を作ることを心得をくべし。

其法一二にして足らずと雖も、最も廉價にして最も手輕なるは左の如し、

＊　＊　＊　＊

先づ二個の卵を破り黄味と白味とを分ち黄味には砂糖と塩とを適宜に加へて牛乳もて溶解し、鍋に入れて燒き、かたきのり位となりし頃をろして菓子皿の上に躰よく盛り、更らに白味の分子を箸にてかきまわして全く泡とならしめ之を沸騰したる湯の中に投ずれば堅くして庖刀にて切るべければ、花形、菱形、適宜に細切して先きの黄味の上に散布すべし、外見美麗にして且つ味よく、中々に品よき菓子を得べし。

松葉うどは實に清楚にして且つ滋養分に富みたる野菜なり。初夏に入らば追々と市に出づべし。今其用法を記さんに、之をうでゝ酢と砂糖の汁をかけて食へば其天然の味を賞し得べし。但し其の太きものは皮をむくの要あれども、七月以後の品ならではさするの要なし。」

次によく〳〵之を乾かしてパンを焼きて之にバタを塗りたるもの（トースト）の上に散布し、形のまゝにし半熟にせる卵子をかけて食ふべし。

＊　＊　＊　＊

すべて菓子と膳菜とにかゝわらず、唯だ金銭をかくる事のみを専らとすべからず、野菜は一滴の水もなき樣になすべく、机には一點の汚なき様にすべく、膳皿の

並べ方は極めて風致ある樣にすべし。是れ人の食慾を鼓舞して通常の物をして甘からしむるの術なりと料理通は云へり。

手藝案内

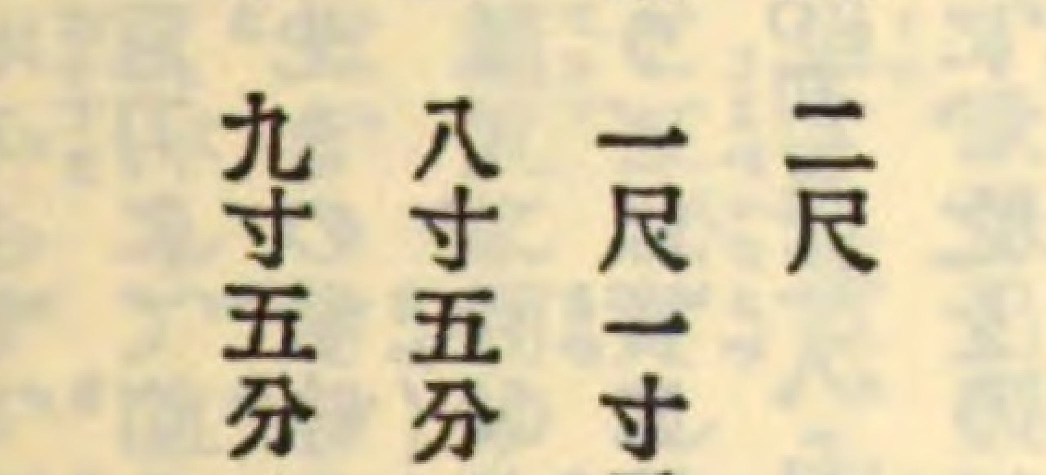
和服裁縫

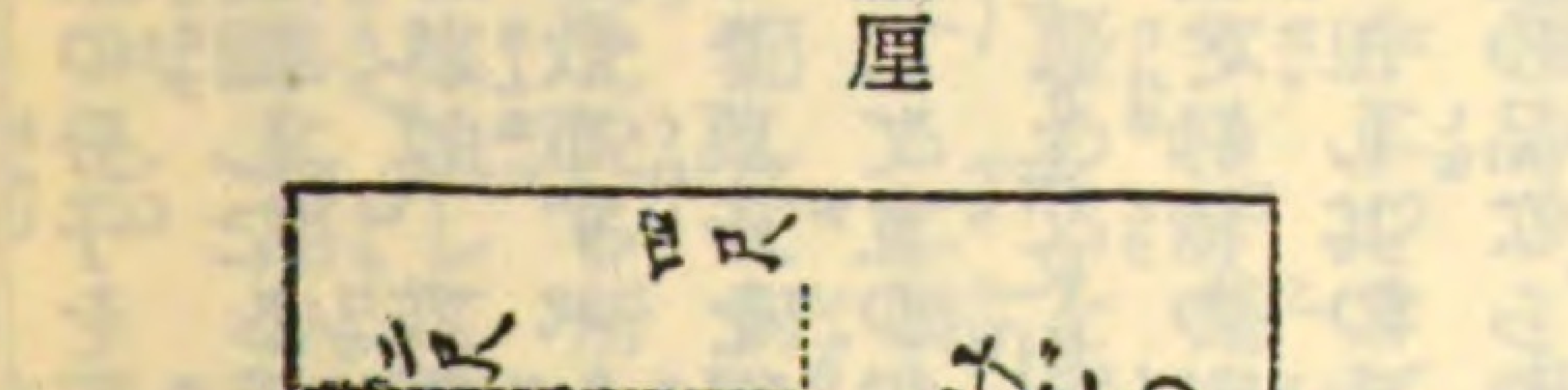
和服裁縫に必要なる道具は針、剪刀、鯨尺、篦、指揮、掛臺、針箱等を最も重なる要具と爲す、針には丸き耳孔と長き耳孔の二種あれど其使用は人々の好々なり、去りながら一般に丸き耳孔の方行はる。又人によりて篦を用ゐるものと用ゐぬ向あれど用ゐる方宜し。指揮には皮又は帛布にて中指の第一節と第二節の間に嵌まるやう造れども、金屬にて指環に造るもの最も簡便なれば一般に行はる。併し指環は數々針の反彈より指を傷くることあれば心して使用し玉ふべし。

初心の人は如何にも針の落着惡しきゆゑに、勉めて串縫を學ぶべし。これは方三四寸の帛布を破るゝまでも直線に針の運を試むべし、然かする時は自と針の落着定るなり。これはほんの手習にて、此業を終らば雑巾、襦袢、單物等の實地に就くべし、但し串縫の間は耐屈なれども長くとも一週間と思はゞ事足れり。

縫方追々上達して何物にても縫ひ得る樣にならば、裁方を學び、始は寸法の通り紙片に切りて練習あるべし。即ち其寸法は左の如し、一ッ身裁方（當歳より三歳頃迄の小供服）

丈　二尺
袖　一尺一寸二分五厘
長　八寸五分
巾　九寸五分





即ち一尺巾八尺五寸を以て一個の一ッ身を製すべく、圖中の點線は剪刀を入るゝ所と知り玉へ、而して圖中の線の部分は餘剩の分にて、贅澤なる向は裁ち去るべけれども、縫直しに心を用ゆる方は與身に縫込み置くこと肝要なり。これにて仕立揚寸法は

丈 一尺九寸五分　身のあき 六寸　袖附 四寸
褄下 八寸　與身下り 二寸　襟丈 二尺四寸五分
襟巾 八分　袖長 一尺一寸

別けて初心の人は襟、與身、フキ等は針の運動得て覺束なければ能く心を用ゐ玉ふべし。

縫箔とハンケチ

坐して何人も出來べく、婦人手藝中にて最も品好きものは縫箔と「ハンケチ」となり。兩個とも別に六ケしき道具を要するにあらで、「ハンケチ」は普通針一本、縫箔の分は角耳牝の針一本あれば、大概の用は足りることゝ知り玉ふべし。尤も種類も夥多あるべけれども、「ハンケチ」の方にて初心の人は、先づ「ヘム」(縁取)を縫ふことなり。これは左程の熟練を要せず、三四度試みなば、自然と針の手も定るべし。縫箔の方は始め木綿に思ふまゝなる縫取を試み、大抵これにて可しと思はゞ、實地にかゝるべし。先づ三子の絹絲もて、豫め白粉にて「ハンケチ」地に型を捺しある摸樣を一針拔に縫取べし。さすれば梅なり、櫻なり、唐草なり、型によりて種々なる摸樣を出す。素より其人の巧拙によりて精と粗の區別は免れねど、兎に角摸樣を生かして縫取るが肝要なり。始は「ハンケチ」の一隅若しくは四隅に縫取し、追々上達するに從ひ机掛、窓掛及其他の美術品に及ぶ。佛國にては結婚前の婦人は、態と躰裁を繕ふ爲め、家內に於て縫箔の手藝を營む由。此二個の手藝は啻に躰裁の好きのみならず、我國に於ても此業を營みて立派に身を立て行くもの多し。目下の處にては「ハンケチ」に縫取の代は下等一枚三錢五厘より上等十錢內外。普通の人にて日に下等五六枚上等二枚、「ハンケチ」の「ヘム」取は一枚八厘より一錢五六厘大小によりて相違あれど、これを專業に營む人は十枚以上の働きを爲す由なり。

社交一斑

西洋禮式一斑（承前）

洋孃子

婚禮

先づ婚禮より筆を起すべし、我國に於ては婚禮等の私事に於ては、未だ公文によりて之を制定せず、且つ新日本も僅に二十餘年の經過に過ぎざれば、社會も未だ此習慣を成立せざれば、一定の禮式さしては見る所なし、唯た服裝食餐等の一部分に於て、漸く洋式を摸擬するのみなれは、決して之を完全なりさ爲すべからず、婚禮に關する一般の儀式に及はざるや甚だ遠し、

喩へば今日我國に於て洋式に婚禮を擧ぐるものあらんか、新郎の禮服は燕尾服さ定れども、普通は「フロック、コート」なり（色は黒、品は羅紗さ知るべし）附屬品なる「カラ」「カフス」（ゴム製又は綿を用ゐず帛布製）、襟飾、襟飾の飾針、「カフス」の飾釦の玉、手袋、シヤツ、ヅボン下、靴足袋の類は悉く白色皎々たるを用ゐ、新婦の方は貴顯の人に至りては、腕さ胸を露はせる大禮服（佛蘭西の所謂「トアレット、ド、シチー」）を用ゆれども、民間に於ては中禮服さ稱ふるもの一般に行はる、これは肩頭尖りの衣服にて、禮式のみに限らず洋人は往復通行の際着用するものにして、佛の所謂「トアレット、ド、ジウル」形なろ歟、婚禮用衣服の地色は男子の黒色の禮服に反對して、悉く白又は淡紅色又は空色を用ゆ、帽子の色より帽子の飾花其他一切の附屬品は、大抵白色を主さするは、白の素さ潔の質他色より秀逸なるに由るなり、我國にても新婦の婚禮用に白無垢を重ぬるは此理由に外ならざらん歟、兎に角祝賀用には白色は九分の勢力を有するさ知るべし、（但し靴はゴムをひきたる黒色の禮靴）

我國にては未だ附屬品に大缺する所あり、（宮中・參内さ夜會等の公式を除き）其の重なるものは扇なり、巴里の交際社會に於ては、宴會に携ふる扇は實に大なる勢力を有す、其形は紫宸殿裡の公卿殿上人が携ふる笏さ、白衣紅袴の宮女達が手遊に玩ぶ所の檜扇さに似て非なる一種の扇なり、巴里の贅澤なる婦人は、小扇一面に萬金を費すもの敢て珍しさもせず、曾て英國の「レデー、マガヂン」（婦女雜誌）は、此流行に對して大なる攻擊を試み、之を東洋の殘物なりさし、七ケ條の理由を擧げて其の絶滅を絶叫したりしも、此流行は滔々さして今日も歐米の交際社會に瀰漫し、「マガヂン」の苦言も其甲斐なかりき、日本にては此般の流行はなきも、一さ通は洋式を學び得たり、併しながら婚禮に於けるも其他の儀式に於ても順序さ配合さを得ず、先づ婚禮の事より洋式の大略を記述せん、

* * * * * * *

洋式も國々によりて其風を異にすれば、一々之を記載するを得ず、然れども佛蘭西巴里は、歐洲の中心點に位し、殊に社交上の如何に關

し、實に大なる感化力を有し、各國爭ひて巴里風を學ぶの勢なれば、今日行はるゝ佛蘭西風を取て、讀者の參考となすの優れるに如かず、

婚禮に至るの順序――自由結婚と干渉結婚の如何は茲に贅言するを要せず、凡て求婚するものは必らず郎より之を爲す、往時英國に於ては婦より之を爲したれども、種々の弊害を伴ふを以て、今日にては文明國と名けらるゝ邦國に於ては郎より求婚するを以て天則と爲す、我國の如きは大古より業に已に之に據れり、而して緣談を爲すものは必らず郎の兩親なり、即ち周禮に所謂取レ妻如レ之何必告二父母一の謂にも似たらんか、若し兩親なき人は親友より、婦の父に(父亡き時は其母)に婚議し、兎に角談合の決定する迄は秘密を主とし、愈々鸞鳳契成に及びては、親族知巳朋友に始て婚配の披露を爲す、披露を受けたる人は、其父母又は親族に對し、新郎新婦の身上につきて萬事沈默するを以て禮德と爲し、答禮に行くにも、其主人に面會せず、たゞ名刺のみを止めて歸る(名刺の體裁、折方等は名刺の條下に記載すべし)、

結納式――披露の翌日新婦の家に於て結納の式を舉ぐ、此式には他人は一切混ぜず、新郎及其兩親(若しくは親友)と新婦の家族とを參列す、其翌日は新郎の家に於て、新婦の家同樣、新婦及其兩親を招待し、郎の家族を紹介す、我國の緣女の歸寧を顚倒したるもの也、

贈物――婚配決定すると同時に、新郎は美しき白色の生花一束を贈る、花は四季の差別なく白色、其後も新婦を訪問(但し婦と面會を許さず其母と面談す)する每に美麗なる生花を撰みて贈る、結納の前には白、婚禮の前には紫なり、結納の指環は結納前に婦に渡すといふ、贈りし花は彼女が幸福なる姿を以て始めて新郎の家に來るの時、花束の中より一點の花を摘み、婦の麗はしき胸の邊に止めて、郎の新しき歡喜を買ふの習慣なりとぞ、

婚禮舉行の期日――兩家に於ては婚禮までは他人の接待を謝絶すと雖も、新郎は新婦の家に訪問、食事は勝手なり、新婦は室内に閉居し、靜に縫箔の業を營み、究屈ならぬ室内服を着け頭巾を被る、而して婚禮式は大抵三周間以上二個月以下の間に執行するを常とす、

流行の栞

盆栽と活花

惣して流行は何物に限らず之れあるものなれど、家内と外用とによりて變化に遲速の差別あり、茲に記す盆栽と活花の流行の如きも、今日俄に流行し始めたるにあらず、三四年前より已に其風を爲したるものなれば、聊か記して同好者にしたりせむと欲す、先づ盆栽は四季折々の時候物を除き、目下の家にては十返り深き綠の松、若葉の楓、石榴の三種其第一位に居り、其木形に於ては自然風を主として、少しにても枝をたはめ、或は剪刀を入るを厭ふの風あり、木質は稚くして大なるを好まず、小さくして古きを賞賛す、鉢は肥前燒尊重せらるれども、

價格の廉ならざるが爲め、名古屋燒八九分の勢にて行はる、其鉢形は先年までは深き方なりしが、今は大に趣を變へて角鉢丸鉢とも淺くして平坦なる方流行す、這は支那風を摸擬するものならむ、次に活花は盆栽に於ける自然風(古流)の流行する如く、花の本質を害する恐ある遠州流は少しく不流行となり、本年に入りて古流專ら流行す、今頃は四疊半の數寄屋の床の間に、まだ得ならぬ梅の蕾を殘し、はや臈闌けし一重櫻の側に、一輪二輪の玉椿の、八千代の色を咲き出づるも床し、

因に記す、本月十六日より十八日まで、芝公園東照宮の大祭あるを好機とし、十六十七の兩日增上寺内に於て、遠州流活花春季大會を催す由、同好の雅客は杖を山内の一重櫻に曳くの道、有名の宗匠達が精を凝らし神を籠めし手際を見ば、此上の一興ならむ、但し縱覽隨意

ランプと火鉢

佐田介石のランプ亡國論も杞憂に過ぎざりしと見ゆ、今日に於て一家の中には何人も用ゐるなり、電氣、瓦斯はあれども小家小屋の用には便ならず、矢張普通用は石油燈なり、さてランプの流行はサシホヤにして、捻止は全く廢れたり、尤も捻止の方は石油の燃費も少なけれども、はめはブし奥行にして往々危險(ホヤの顚落する)あれば自然サシホヤに入氣の移りしなり、心は丸心流行、蓋は紙製と玉蓋、書生用には相變らずガラス臺の置ランプ用ゐられ、臺所用には是迄はブリキ製のカンテラを用ゐ來りしが、風に火の消ゆは火の用心の爲めホヤ附臺なし摘み附の小ランプを用ゆ、讀書用にはランプの光は眼膜に刺害ありとて西洋蠟を焚く、近來我國にて石蠟なるものを賣り始めたるが其效果して如何にや、火鉢――嚴寒の時節は國粹的家庭にては、舊幕諸侯の書院向火鉢を用ゐ、又風流の家にては、敗鼓の胴を利用したれど、此頃は敢て火鉢を撰するの時候にあらねば、昨今重に行はるゝは中形の應接火鉢なり、唐木に黒檀の緣、桐の胴丸、籐製の籠火鉢等、

門札

門札は舊幕時分より、陶製世に出でたりしが、體裁の能きと雨泥の爲め欠損せらるゝ恐なき爲か近來紳士の家らしき門には必らず此標札を揭ぐ、釘頭を表面に現はさず、黒白相和し甚だ體裁の調和を得たり、姓名等の揮毫は大書家と特約あるよし、轉居の際などには取外し自在なり、

日和下駄

一昨日和下駄は職人か、勇み肌か、髪床屋の主人の履くものと極め居れど、近來は堂々紳士の間に行はる、マサ上等二十錢より三十錢、鼻緒は鼠霜降好の牛皮若しくは羅紗なり、廉なる所にて十錢より十七八錢まで、

洋服に下駄

洋服に下駄の流行は先年より今に遑ます、ソボ／＼降り出す春雨に、朝夕に「フロックコート」を着け、蛇の目傘を翳し高下駄を穿ち行き、其

様酷だ小野道風柳下蛙を見るの觀あるは、判任官が殿辨當を提げて官省に上下する姿なり、破れ破れて垢染みたる洋服を着け、足袋足に日和下駄をつゝかけ行くは、日々勞働の門に入る職人の風體と知り玉へ、

流行夏向舶來品（婦人用）

近日新橋金六町關口商店に澤山到着したり、西洋にて流行の品なれば無論我國在住の洋人又は洋風家の間に流行すべし、

女麥藁帽子「ハット」　は昨年の流行に比し形は山低丸味小さく、縁は狹き方にて、色は白、黒、紺、（代價自壹圓至二圓）

同「ポチット」　は形は小、其他の事は「ハット」と同事（代價自壹圓至二圓）

同飾付　「ハット」は（代價自三圓至八圓）「ポチット」も同樣なり、

子供麥藁帽子　流行色は色、ゴマ（代價壹圓至二圓）

同「レース」帽子　は「ハット」「ポチット」共に、色は白、鴇、鼠（代價自七十錢一圓五十錢）

女帽子飾花　色は白、藤、鴇、白茶、「クリム」（白に淡茶をかすめたろ色）（代價壹本に付き自五十錢至二圓五十錢）同飾羽子も色も代價も同斷、

同「ビーツ」（飾玉）　形は花、蟲（代價自三十錢至壹圓）

「リボン」　色は白、赤、黒、鴇、藤、淺黄、蝦、紺、鼠、「クリム」、白茶、品は繻子廢れ、琥珀又は天鵞絨專ら流行（代價一ヤード自十錢至五六十錢）

女夏用「メリヤス」　薄毛又は木綿、麻（代價自四十錢至一圓五十錢）

女夏用手袋　品は絹、麻、木綿、色は白、黒、鼠、白茶、鴇、鼠、淺黄（代價自三十錢至一圓六十錢）

同「ミーツ」（半手袋）　品は絹、色は同前（代價自五十錢至一圓五十錢）

女夏用靴足袋　絹、麻、木綿、色は白、黒、紺（代價一足に付き自四五十錢至二圓五十錢）

「ハンケチ」　絹（代價一打自二圓至五六圓）

同「ヘム」　代價一打貳圓五十錢より五六圓

同「ケンベレキ」（木綿と麻との織混）　一打一圓四五十錢より二圓二三十錢まで、

同木綿　一打三十錢より九十錢迄なり

日用品物價（四月十日）

⊙白米　近來異動なし（圓に付）
●一等白米九升八合●二等白米一斗〇三合●三等白米一斗〇八白●四等白米一斗一升四合●五等白米一斗二升二合

⊙雜穀　これも持合（圓に付）
●室蘭小豆一斗五升六合●粕壁澁色小豆一斗三升五合●本場達摩金時一斗二升五合●銚子隱元一斗〇八合〇目無白さ九升八合

⊙鹽（圓に付）
●赤穗三俵五分五厘●大鹽三俵六分五厘●八家三俵七分五厘●本齋六俵二分●新齋七俵一分●古積上二俵七分五厘●同中二俵九分五厘

⊙西洋食料品
四ダースに付●鳥印ミルク十二圓二十錢●人形印ミルク八圓五十錢
一ダースに付●食鹽一圓九十錢
一ダースに付●カラシ粉二圓五錢●胡椒粉十圓五十錢
一斤に付●地球印バタ三十七錢●同半斤に付廿二錢
一打に付●ビスケツト二斤入四圓六十錢
六ダースに付●ジヤム十一圓

序不同なり）。

東洋英和女學校

東洋英和女學校は麻布東鳥居坂十四番地にあり、日本メソヂスト教會の管理に屬す。

學年を豫科三年本科五年とし、豫科普通學部に於て倫理說物作文算術習字地理圖畵歷史を授け、英學部にて英語讀方譯讀書取習字會話文法作文、副科に於て禮節裁縫毛系細工唱歌体操を教へ、本科普通學科にては倫理國語漢文數學理學習字圖畵家事を、英學部にては英語讀方譯讀書取習字會話文法作文倫理地理歷史文學を、副科にては禮節裁縫編物唱歌体操皆約全書史制?を教ゆ

月謝及び諸費は

束修		金壹圓
授業料	豫科　壹ヶ月	金壹圓
同	本科　仝	金壹圓五拾錢
煖料	仝	金參圓
浴湯其他雜費	仝	金三拾錢
音樂授業料	仝　ピヤノ	金貳圓
	オルガン	金貳圓
	琴	金五拾五錢
彩色授業料	仝	金貳圓
刺繡	仝	金五拾錢

共立女子職業學校

共立女子職業學校は神田一つ橋通町二十二番地にあり、女子に適應せる技藝職業並に必要の學科を授く、宗教的のものにはあらず。教科を甲乙二科とし、共に裁縫編物刺繡造花圖畵等を教ゆ、尤も甲科は通例一科若くは二科、乙科は一科に限れり、而して術科の外は共に修身讀書習字算術家事理科を課し、望みによりては英語をも兼修せしむ。甲科三年。乙科二年。圖畵科は甲科四年。乙科三年。

甲科は尋常小學科を卒り、若くは之に等しき學力ありて十二年以上のもの、乙科は十五年以上にしてほゞ讀み書きの出來得るもの。

生徒募集期は九月なれども、欠員あれば臨時入學せしむ。而して授業は毎日七時間。

雜録

◉靑物の走り　神田多町の靑物市場に於ける昨今の走り物の相場を聞くに胡瓜本場は大（二寸五分より三寸迄）一本に付八錢より十錢◉獻房州產は先月中旬より市場に現る（丈け二三寸のもの五六本束）一把に付目今一錢◉豌豆此程より出初む一升三十錢位◉隱元豆此程より出づ丈け一寸五分のもの一升價三十錢なりと

◉筍　發生例年より遲かりし爲め値段は一貫目五十錢位なりしが昨日より卅錢に下落

遺珠顆々

榮譽と耻辱は地位より起るものにはあらず、よく爾の職を盡せ、爾の榮譽此處にあり　　ポープ

人を愛せずして人の愛を得むと欲するは霜柱の上に臥して暖を求むるが如し　　ピーチャル

女學校

其一　東都私立學校

夥多しき學資を給して可愛ゆき娘子の未來世にも人にも耻ぢぬ淑女となれかしと祈りし甲斐なく、學び得たるは蓮葉なる振舞のみ。斯くては女子教育も役に立たぬぞかし。

さは、一時女子教育の繁昌したる時代に反動なしにき傾きなりし。去るに角を矯めて牛を殺すの愚は忽ちに人の覺りけるものから、今はやうく何れの學校も引きしまりて物靜に進み行くべうなり、まことの女子教育はこれよりいよく興らんずなりぬ。去れども數多き學校の中入により て適不適もあなんめれば、學校の撰擇は第一に忽かせにし難き事なり。若し其の撰擇にして誤らん乎又もや女學恐慌の時も來るべし。官立の學校は其事情何人にも知り易き所なれば、我等はまづ東都の私立學校より其景情をしるべして、世の物學びする人々にしなりすべし（順

兩科の術科課程は

裁縫	小裁、中裁、本裁衣服、シヤツ、ヅボン下、子供洋服及附屬品等
編物 附飾朝	衣服附屬品及裝飾品、婦人帽子飾等
刺繡	綴繡、平繡、けし繡、すが繡、すから繡、肉入繡等
造花	花簪及裝飾品等
圖畫	水墨畫、模樣畫、陶器畫等

同しく學科課程は（乙科はやゝ低し）

學科	每週時間	
修身（講義）	一	女子の心得方
讀書（讀方 作文）	二	讀方普通文 作文消息文
習字	二	平假名、行書、英書
算術（筆算 珠算）	二	筆算加減乘除、分數、小數、諸等數、比例、家計簿記、珠算加減乘除、利息算
家事（附 割烹）	一	衣食住に關する家事の管理法
理科	一	生活上緊要なる理化學の要項

術科に於ては生徒課習のため、世上の注文品を製作せしめ、其純益金半額を生徒の名前にて遞信省郵便爲換貯金局に預け、卒業若しくは要用あるときは本人の申出に依り之を下げ渡す。

一ヶ月學費大略

授業科　甲科一圓三十錢　乙科八十錢
裁縫科　三十錢乃至五十錢
編物科　五十錢乃至八十錢
圖畫科　四十錢乃至五十錢
造花科　卅錢乃至五十錢（但入學の當時器械費凡二圓五十錢を要す）
刺繡科　卅錢乃至五十錢（但同上の時木製刺繡器費凡金八十錢を要す）
書籍筆墨紙　十五錢乃至二十錢
寄宿費　四圓

而して造花科には別に校費生を置けり。修業三年、乙科と同しき取扱を受け、在學中は私用の造花を製作するを許されず、又卒業后一ヶ年間は何時にても本校の召集に應じて造花の製作に從事するなり。但衣食住等に東脩月謝を要せず造花に要する一切の器具材料を貸與す。而して其第二學年の修業を卒りたるものには製作品純益金の何分を給與し、卒業後本校に召集する時は相應の手當を給す。

資格は略ぼ讀み書きを爲し、入學后四ヶ年間東京に在住することを約し家事に係累なきもの滿十四歲以上三十歲以下なり。

（未完）

談叢

水戸義公の料理

水戸義公名は光圀とて、德川氏三百年の賢諸侯なり。家大日本史の編纂を以て誰知らぬものなき人なるが、家庭に於ける彼も極めて尊ぶべき彼なりき。

彼嘗て湊御殿に在り、折しも夏の日の事とて、魚など捕りて凌暑の慰みにせんと用意してけるが、其臣原忠衛門と申すもの公用にて來りぬ。

然るに原は主公の今遊漁に出で立たんとするを見て、

事はてゝ後啓せんとひかへ居しに、彼は此由を聞き、『我が殺生は慰み事なり、忠右衛門が事は公用なり、今日の出遊は思ひ止まるべし』とて其日の遊を止め、さて原を喚びて用事の趣を指圖しける。公用とて差したる事にてもあらざりければ、其事ども談りし後、彼は言ひき。

『さて其方暑氣のところ太儀なり、幸に華藏院より麥粉をもらひ置きたれば我れ手うちにして冷麥をふるまふべし、まづ其處に在りて見物せよ』。

彼は命じて冷麥をこしらゆべき諸道具を持出しめぬ。

『饂飩と冷麥とは、鹽加減ばかりのものなり』。

それより彼は打ち始めしが、其打つ拍手といひ、切る手際といひ、天晴れ饂飩屋も三舍を避くる程なりき。

彼笑て曰く、何と忠右衛門我を折りたるか』と。原は拜伏して答へぬ、『恐入りて、何れとも申上げやうの候はず』。

彼曰く、『我れ若き時、江戸淺草邊にてこれを造るを見、度々其眞似をして之が拍子を覺え、其後屢手製したり、總て食物の事は自ら製して試むべき事なり。江戸の邸中にては田畠をもうなひたり、季姫（夫人有栖川氏）などは京の所生故、上品の事は何も知りたれども、卑賤の事をば解せざれば、愛憐の念薄く、人情不通なるもの故、我等之をなして見せたり。又米の搗きやうをも爲して見せたり。鳥の餌と名けて籾を取寄せ、山組の内に功者なるものに臼杵を求めさせ、搗きたるに、箕ふきをせざれば糠よくぬけざる故ふきて見たれど、これはなりかぬる故功者のものにふかせ、後飯をたかんと思ひ、水加減とぎやうなどを習ひ、度々たきたるに、これは如何にもなるものなり。魚鳥の料理は庖丁人ともに習ひたり』。

斯く彼は語りつゝ漸々冷麥を切りあげ、厨夫に命じて之をうでしめ、さて忠右衛門に賜ひける。忠右衛門はこれをこよなき面目に覺え、其後度々此事を人に語りしとなん。

女　詩　人

理想派寫眞派など言ひて、文作る人の中に、西洋繪師

一の如く實景に因りて書くもあり、又東洋畫家の如くに理想を基礎として作り出すもあれど、如何に理想を基礎とすとはいへ、僞りを作りては、決して妙所に到り難き事なり。
享保寶暦の頃世に名高かりし女詩人加賀松任の千代女の如き、よく此の理りを知りし故、斯くは名譽の詩人となりしなり。
彼女が俳道に悟入したりし話は世人の能く之れを知る所。
彼女は稚き時より文雅を好み、其頃美濃の盧元坊とて俳歌に名高き人なりければ、之に學ばんとは思ひたれど、女の身として遙々行くことも叶はで、昨日と暮れ今日と過ぎけるに、一日の事とてはからずも世に嬉しき報知に逢ひぬ。『盧元坊行脚して來り、近き邊りの旅亭に宿りけるよ』と。
彼女はいそ〳〵打喜びて直に其逆旅に就き敎を乞ひけるに、已に夜なりければ、盧元坊は晝の疲にてはや寢ねける。
彼女は强て逢ひたきよし請ひけるに、坊もさらばとて、打臥せるまゝ枕頭に延き、『郭公なりと咏みて見給ふべし』と言ひき。
彼女は常々心掛けあることとなれば、直樣一首を咏みて見せけるに、坊は見て、『これは俳諧になり申さず』と云ふ。さらばとて再三試みたれども皆好からぬよし告げられぬ。今度こそはと思ひ、頗る苦心推敲して一首を得、之を示さんとせしに、坊は既に睡りける。
彼女は坊が枕頭にしよんぼりと坐りて、しん〳〵と更け行く夜半を經營慘憺の中に過ごし、燈の影暗く、人の寢呼吸の凄まじくも恐ろしく聞ゆる頃、坊が眼を覺ましゝを見て見せければ、亦これをも不可となしぬ。」
既にして窓は白みぬ、夜は明けぬ、勝手口には旅亭の下女が起き出る音聞えぬ。
彼女は覺へず溜息吐きつゝ口占めり、

郭公〳〵とて明けにけり。

坊掌を拍て喜で曰く、名句、名句。
あはれなる彼女は始めて覺りぬ、『已が深く想を搆へて

巧に作らんとしたりしは皆僞りの趣向にして、妙處は却て手近かなる實境にありけるものを』と。

昔西行法師が俊成卿の勅を奉じて歌集を撰ぶと聞き、其詠草を持行きて採用せられたしと請ひしに、俊成見てあし〻と返しければ、法師は庭に立出でけるに、折しも月冴え渡りしを見て、西行

歎げとて月やはものを思はする
かこち顔なる我が涙かな。

俊成驚て之を呼びかへし、直に之を取りたりと傳ふると、同日の談ならん乎。

去れば彼女の作は、皆實境より着想して、調優に格高く、千古に傳ふべきもの少なからぬなり。

其早起して手桶片手に井近く行き、露のひぬまの牽牛花の蔓を引きて井綆に纒ひしを見、汲むを輟めて

朝顔につるべとられてもらひ水。

と言へる如き、優にやさしき乙女心、愛才の情の如何に深きよ。文雅の理想の如何に高きよ。

而して其始めて婚を結ばんとすせし時、

澁かろか知らねど柿の初ちぎり。

十七字中萬語千言にても言ひ盡きざる情景を竭して憾みなし。

年廿五にして不幸にして夫を喪ひ、

起て見つ寐て見つかやのひろさ哉。

と言ひき、其眞情掬すべからずや。

兒を哭しては、

蜻蛉つり今日はどこまでいんだやら。

燒野の雉子、夜の鶴、子を思ふの情何ぞ限りあらん。今日までも昨日までも驅りまはりし奔走子が、忽焉として已に彼の世の迷子ならんとは、爭でか慈母に信ぜられんや。彼の兒の慈母は猶其ひそうものが蜻蜓つりにあるを氣遣ふなり、其歸りの遲きを氣遣ふなり。又走り來て其袂にすがるべく想ふなり。其の一點の邪念なき愛、其無心の限りなき悲痛、惻焉として人を動かすに足る。皆是れ實境より來れるもの。

彼女は尼となりて素園といひ、年七十三にて終りぬ。

時事一斑

鳫乎燕乎

三月廿日郡司大尉の一行は短艇墨堤を發し、春風二州橋下を過ぎて去れり。北亞細亞の旅行家福島中佐は將に日麗かなる春波に觸して來らんとせり。彼は雁の如くに花に背て去り、此は燕の如くに春を趁ふて來る。風は客衣を吹て疇昔の寒きには似ず、皈來埠頭人花の如くなるべし、亦人生の快事ならずや。

新大學總長

三月卅一日、加藤弘之氏大學總長を免せられて、濱尾新氏之に代れり。新紙子曰く、彼は大學の曲學界に於て、やゝ傾斜的の直學者なり、文部の濁流にありて、やゝ浸潤的の清流たりと。

井上哲次郎氏

井上哲次郎氏宗敎と敎育とを論じて大に基督敎を排し、爲に物議を惹けり。人目して新曲學家となし、彼は外山正一氏に代らんが爲に曲學するなりと言ふに至りき(固より事實なき言なるべけれど)。而して彼は之に對する高橋五郎氏の駁論の如き、仲裁を請ふて之を見合せしめしと云ふ。

日遲々

茶の世は既に來りぬ、桑の時亦將に到らんとす、東家西家正に日遲々。

行樂

都の錦花柳こきまぜて、春色あらん限りを着飾りぬ。僅に門を出れば巳に紫陌紅塵拂レ面來を見るべし。」城西に去らん乎、城北に去らん乎、春城處として花ならぬは莫し。日麗かに風暖かく、いそいそと浮立つ人心、ア、世にたへて櫻のなりせば春の心はさこそ長閑けかるべきを。

滿山花の山ならずして人の山となりぬる忍が岡、早きは散り、晩きは發き、厭ふへきは醉客、愛すべきは小供連れ、心にくきはのさばり行く紳士、目につくは赤

けつと、共に花に魅せられ來りしものなりけらし。唯



松杉色深く花を罩めたること床し。

日暮里は、花見寺最よし。山里の春の夕暮來て見ば、入相の鐘に花ぞ散けるの面影なきにしもあらざらん。

道灌山、以て運動會を催すべし。

向島は長堤花一帶、堤上に立てば衣香人を襲ひ、輕舟に上れば花影棹さすに處なし、復た都鳥の昔を言問ふべくもあらず。頭を擧くれば、東天筑波の翠雲。西天富岳の白雪。

淺草公園、深川公園、日枝社下、九段坂上、花處々なり。僧辨玉曾て歌ひき、『花ぐはし、櫻さけれは、我宿の、花に人待ち、人の家の、花も見がほり、今朝も又、訪はんとすれば、鶯のひとくととじむ。今朝もなほ、やめんとすれば、子鴉の、いざあと誘ふ。いざ今日は、汝が行く方の、咲く花の、宿を訪はまし、鶯に、我家の園の、花はまかせて』。

小金井は、玉川上水の兩岸に櫻限りなくつゞき、急潮花を碎て流れて盡きず。關左の大花塲なり。內藤新宿より花見滊車通ふめる。

九十の春光櫻時にあればにや、花開いて風雨多ければにや、樹下は晴にも雨にも遊人を見るなり。亦

　櫻かゝり雨はふり來ぬ同じくは
　ぬるとも花のかげにかくれん。

とするものある乎。

潮干狩は、陰曆の三月三日及び十五日廿七日好し。舟出の處は、品川、洲崎、芝浦、高輪、佃島、中川沖。

桃花は已に遲かりき。

四月八日の釋迦誕生も過ぎぬ。

唯此の月末より十軒店に兜人形市あるべし。

要するに四月は郊外の季節なり。花ある、花なき、皆好々。探紅せよ人、踏青せよ人。

ゼームス、ブライス著、人見市太郎譯

平民政治

合本貳冊二千九百卅頁餘
正價四圓、運賃二拾錢

當分の中は特別を以て貳圓五拾錢に減價す 運賃弊社持ち

田口卯吉、肥塚龍、尾崎行雄、三氏序 德富猪一郎著

七版 **新日本之青年** 定價貳拾錢 郵稅四錢

酒井雄三郎著

排曲學論 定價拾五錢 郵稅貳錢

德富猪一郎編纂、久保田米僊揮毫挿畫

三版 **誕生日** 定價拾五錢 郵稅貳錢

人心の明鏡處世の秘寶

三版 **一語千金** 定價五錢 郵稅貳錢

撰擧實錄 定價拾錢 郵稅貳錢

文學博士元良勇次郎氏著

佛國不換紙幣發行始末並信用論 全 定價十錢 郵稅二錢

佛國法律博士本野一郎氏述

多數撰擧之弊付矯正策 全 紙數八十頁 定價十五錢 郵稅二錢

國民之友自第一號至第八號社說及特別寄書

國民之友第一集

紙數三百二頁 定價二十錢 郵稅四錢

國民之友自第十五號至第廿四號社說

國民之友第三集

紙數二百廿八頁 定價十五錢 郵稅四錢

國民之友自第廿五號至第卅六號社說

國民之友第四集

紙數二百六十八頁 定價十八錢 郵稅四錢

自第十四號至第廿四號十一冊合本
○國民之友第二卷 四拾錢

自第卅七號至第五十四號十八冊合本
○國民之友第四卷 五拾五錢

自第五十五號至第六十八號十四冊合本
○國民之友第五卷 五拾錢

自第六十九號至第八十六號十八冊合本
○國民之友第六卷 六拾錢

自第八十七號至第百四號十八冊合本
○國民之友第七卷 六拾錢

自第百五號至第百二十二號十八冊合本
○國民之友第八卷 七拾錢

自第百二十三號至第百四十號十八冊合本
○國民之友第九卷 七拾錢

自第百四十一號至第百五十八號十八冊合本
○國民之友第十卷 七拾錢

自第百五十九號至第百七十五號
○國民之友第十一卷

正價 七十錢

品切レ書物

國民之友第一卷　國民之友第二集　國民之友第三卷
小楠遺稿　探偵ユーベル　國防論
今世名家文鈔　進步乎退步乎

〔郵稅を要せす〕

明治廿五年九月十四日遞信省認可

ヘルス

定價
六合分 十六錢
一升二合分 廿八錢
三升分 六十五錢
六升分 一圓廿錢

郵税
二錢
二錢
四錢
八錢

東京は本舖に於て配達す●爲替は東京は神田郵便局又は三井銀行へ大阪は順慶町郵便局又は三井銀行へ振込あれ●郵券代用は一割増し

効能 身體の薄弱なる人、過度に精神を勞する人、婦人產前產後、記臆力の弱き人、忍耐の乏しき人、氣力減乏、貧血諸症、諸病の衰弱、過淫より來る衰弱、諸出血より來る衰弱、病後の恢復期等に効顯著なり又肺病胃病患者に最良の滋養飲料たるとは諸大醫の實驗證明せらるゝ所なり

諸大醫證明之例

貴族院議員海軍々醫總監醫學博士 **高木兼寛君證明** 貴舖製の「ヘルス」は滋養に富み飲用し易き、、、、、、、を以て患者は勿論無病者と雖もこれを服用すれば其健康に大なる裨益ある者と認む

山龍堂病院長從六位醫學博士 **樫村清徳君證明** 貴舖製造の「ヘルス」は實驗日尚ほ淺しと雖も蛋白、、、質に富み消化容易にして頗る滋養に適するものと信ず

婦人科產科專門櫻井病院長醫學士 **櫻井郁二郎君證明** 貴店製造の「ヘルス」は分析表に依れば有効無比の良品たること贊成致候

此類の證明夥多あれども紙幅限あるを以て掲載するを得ず

注意 「ヘルス」は賣藥に非ず取次をなすに面倒なく病人は勿論一般無病者を得意とするか故に販路最も廣し摸造品あり「ヘルス」の三字に注意せられよ

「ヘルス」は日本全國有名なる藥種商賣藥商洋酒商罐詰店料理店雜貨店等に販賣せり

取次望の人は至急御申込あれ取次規則送附すべし

ヘルス發賣元
東京神田區鍛冶町 電話千八十二番 **森田商店**
大坂心齋橋筋南久太郎町 **森田支店**

東京市京橋區西紺屋町廿六七番地 秀英舍印行